

「豊かさ」に関する意識の変容(4)

—— 1955年から1964年までの「豊かさ」に関する意識の様相(下) ——

富貴島 明

10. 1963(昭和38)年

(1) 政治・経済

景気回復の年であった。鉱工業生産は、1月から上昇に向かった。しかし輸入増大による国際収支の大幅な赤字を解消するために、年度末に金融引き締め政策が実施され、調整色が現れた。輸入増加の要因は、次のようなものがあげられる。キューバ危機やハリケーン被害、ヨーロッパのビート糖不作による砂糖価格の急騰、海上運賃の値上げによるトウモロコシなどの雑穀類の値上げ、木材や飼料の輸入増、自由化による完成品消費財の輸入の増加が、順調に拡大しつつある輸出の増加よりも大きかったのである。だが在庫投資と設備投資が増大し、景気を支えた。在庫投資は、消費構造の高度化と多様化、販売競争の激化により、増大したのである。稼働率を落とすための生産調整がうまくいかなかったことも、製品在庫を増大した原因であった。設備投資の増大は、需要の拡大、銀行貸し出しの増加が、要因としてあげられる。また、翌年のオリンピックを控えての公共投資の充実も、景気を支えた(土志田征一編、経済白書で読む戦後日本経済の歩み、94頁)。

主な経済指数は次のとおりである。経済成長率実質8.6%、名目14.4%。国内総生産25兆1,132億円、前年比実質8.8%増、名目14.4%増。1人当たり国内総生産26万2,000円。国民所得20兆1,919億円、前年比15.4%増。民間最終消費支出・実質9,785億円、名目1億1,861億円。国家予算3兆568億円。年末現在日銀券発行残高2兆574億円。財政投融资1兆2,072億円。四輪車生産台数100万台を突破し、128万3,538台。四輪車輸出台数10万台に迫り、9万8,564台、前年比47%増。四輪車新規登録台数100万台突破し117万台。二輪車生産台数192万2,970台。二輪車輸出台数40万台。本年度産米1,281万t。米価975円。初任給1万7,100円。勤労世帯1ヵ月間の実収入5万6,745円。総広告費2,982億円・前年比122.5%増。

1月5日、自治省は、地方財政が664億円の黒字であると発表した。1月9日、ライシャワー大使は、原子力潜水艦の寄港を大平外相に申し入れた。1月12日、千葉県庁職員の土曜日半数

休暇制が実施された。しかし政府の中止要望で、2回だけで取り止めになる。1月14日、経済審議会は、「人づくり」で、徹底的能力主義の採用などの内容を首相に答申した。1月15日、宇部興産は、本山鉱閉山など炭業合理化を提示する。1月16日、東京に能力開発研究所が設立された。大学入試の改革を立案する。11月16日、第1回能研テストをおこなう。1月25日、ビルマ賠償覚え書きに署名した。純賠償1億4,000万ドル、借款3,000万ドルである。賠償請求国は、フィリピン、インドネシア、ビルマ、南ベトナムの4ヵ国である。要求額は合計で約300億ドルにも達し、1952（昭和27）年から交渉が続けられてきた。各国と協定を結び、翌年の3月にビルマへの追加賠償協定で、交渉は終結する。日本は、21年間に10億1,280万ドルの賠償金、無償経済協力4億9,576万ドルを支払ったことになる。通算で国民1人当たり5,000円を負担したのである。しかしこれらの賠償が、日本の経済、特に造船、自動車、電機などの一部の重工業を育成する効果を生み、またダムなどの建設業に海外進出のきっかけを与えた。日本資本の東南アジアに再進出する絶好の足がかりを与えたのである（有沢広巳監修、昭和経済史、357～359頁）。1月、キヤノンは、大企業では初の完全5日制を実施した。週休二日制は、1975（昭和50）年になりやっと70%の企業に普及した。1月、河合楽器は、市中銀行と提携して初のピアノローンを開始した。1月、所得倍増ブームで、大阪の今宮戎神社の初詣のお賽銭に1万円札2～3枚が初登場した。

2月1日、トヨタ自販は、マイカー・ローン（自動車消費者金融制度）を実施した。業界初である。いすゞは4月、プリンスは7月、ダイハツは11月から、それぞれ都市銀行数社と提携し、融資を開始した。そのせいもあり本年度の四輪車生産台数と四輪車新規登録台数は、ともに100万台を超える（日本自動車工業会編、日本自動車産業史、165頁）。2月6日、IMF理事会は、対日8条国移行勧告「国際収支の理由で為替制限の禁止」をする。2月20日、日本はガット理事会でガット11条国「国際収支を理由とする貿易制限の禁止」へ移行の政治決定を通告した。2月26日、石炭鉱業審議会は、本年度の合理化計画を答申した。1960（昭和35）年の炭鉱数622、生産量5,261万t、実働人員23万人が、1985（昭和60）年には炭鉱数31、生産量1,645万t、実働人員1万5,000人とする計画である。2月、消費生活コンサルタントが日本に初登場した。全部で14人。

3月1日、自動車メーカー各社は、新車保証期間を「3ヵ月または1万km」から「1年または2万km」に延長した。3月11日、1962（昭和37）年の対共産圏輸出は、前年比2倍との発表があった。3月20日、日銀は、公定歩合を1厘下げ、1銭7厘とする。4月20日さらに1厘下げる。3月31日、外貨公債発行法が公布された。産業投資特別会計の財源として発行する。3月31日、中小企業近代化促進法が公布される。

4月4日、経済閣僚懇は、生鮮食料品価格安定策を発表した。キャベツと白菜に調整金をあて

る。4月10日、簡易保険および郵便年金積立金が1兆円を突破した。4月17日、第5回地方統一選挙で、2大市長に革新系市長が誕生した。横浜市長は社会党の飛鳥田一雄、大阪市長は革新の中馬馨。4月27日、東京都地盤沈下審は、工業用とビル用の地下水採取規制を答申した。

5月3日、日本自動車協会の主催で三重県の鈴鹿サーキットで第1回日本グランプリ自動車レースが開かれる。A部門が国際スポーツカー、B部門が国内スポーツカー、C部門がツーリングカーの3部門であらそわれた。10万人が詰めかけた。自社技術を公開し、需要を喚起した。日本の自動車メーカーは急速に発展していた。ポルシェ、トライアンフTR4などの外国製スポーツカーを相手に、クラス優勝したのが、ダットサン・フェアレディSP310型であった。4日まで続く。5月12日、水爆積載可能なアメリカ空軍F105Dジェット戦闘爆撃機14機を、沖縄から板付に配属した。5月14日、閣議は、第2次世界大戦の戦没者追悼式を毎年8月15日に、政府主催で開くことを決定した。5月21日、日米綿製品交渉は、事実上妥結した。総枡8,750平方ヤードを雑品扱いにすることを公文に記した。5月31日、全国の加入電話が500万台を突破した。5月、日立家電は、蛍光灯スタンド「ムーンライト」を発売した。人気商品となる。1980(昭和55)年にはロングライフ・デザイン賞を受賞する。

6月5日、関西電力の黒部川第四発電所(通称・黒四ダム)が完成式をあげた。ダムの高さ186m(世界第4位の高さ)、地下発電所、出力23万4,000kW。阪神工業地帯の電力不足解消のため、1956(昭和31)年着工以来7年、513億円の費用と延べ990万人がつき込まれた難工事であった。そのため167人の犠牲者がでた。だが本年3月に、火力発電量が水力を凌駕し、火主水従の発電方式が決定的となる。火力発電の熱源も、石炭から石油に代わる。6月5日、外務省は、原子力潜水艦の安全性と損害補償にかんする日米交渉の中間報告書を、衆議院外務委員会に提出した。6月16日、横須賀で原潜寄港反対集会が開かれ、1万人が参加。6月11日、全国建設業協会は、大工や土工の不足数13万人と発表。6月18日、自民党は、衆議院社会労働委員会で、職安法および緊急失業改正案を強行採決する。本会議では、社会党が牛歩作戦で抵抗する。6月23日衆議院、7月1日参議院を通過する。6月29日、外国為替管理令を改正・公布。資本取引の自由化措置のためである。

7月1日、金属鉱業等安定臨時措置法を公布する。貿易自由化対策としての、5年間の時限立法である。7月1日、海運再建二法を公布。海運業界各社の大規模な再編成を進め、過当競争の防止を図る海運業再建整備臨時措置法と、利子補給措置の強化を定めた外航船舶建造融資利子補給法等改正の二法である。大規模な企業再建を促進する。最終的には6グループに集約され、償却不足の解消と収支改善が図られた。新造船の建造とトン当たり運賃の引き下げも進んだ。海運業界の競争力強化に大きく貢献した法律であった(有沢広巳監修、昭和経済史、444頁)。7月8日、職業安定法、緊急失業対策法の各改正・公布。7月17日、ダブリンで開かれた技能五輪で、金

メダル10個を獲得。7月12日、閣議は、新産業都市に岡山県水島、青森県八戸市など13ヵ所、工業整備特別地域に茨城県鹿島など6ヵ所の指定を決定する。7月15日、経済企画庁は、『経済白書』で「先進国への道と高成長・高福祉型経済を目指す」ことを発表した。7月18日、池田改造内閣が成立した。7月19日、アメリカ製品優先買付などによるドル防衛策強化を内容としたケネディ教書の発表により、株価暴落する。東証ダウ64円余安は、開所来の下げ幅であった。7月20日、中小企業基本法が公布された。今までの保護主義から転換して、中小企業の設備の近代化や経営の合理化を目指した措置をとることを主眼とした(有沢広巳監修、昭和経済史、410頁)。7月26日、経済協力開発機構(OECD)理事会は、日本の加盟を承認した。

8月1日、失業保険法の改正公布。8月1日、東証1部の取引単位が、1,000株に倍増。8月23日、防衛庁は、低空用地対空ミサイル(ホーク)の第1次大隊を、北海道(千歳など)に配置すると決定した。8月27日、政府は、日米綿製品取り決めを、ワシントンで調印する。いわゆる8ヵ月交渉である。日本綿業6団体は、「制限強化は遺憾である」との声明を発表した。8月24日、第11回世界連邦世界大会が、東京と京都で開催される。8月30日まで。アジアで初。8月31日、砂糖や化粧品など35品目を自由化した。自由化率92%。8月、東洋紡績は、敦賀工場でスパンデックス(日産1t)の生産を開始した。

9月1日、安保反対国民会議などは、アメリカ原潜寄港反対集会を、横須賀と佐世保で開いた。9月6日、閣議は、全官庁に「小さな親切運動」の展開を決定した。9月9日、物価問題懇談会の初会合が開かれる。座長は中山伊知郎で、経済企画庁長官の私的諮問機関である。9月14日、新三菱重工が設計・製作した、国産初の小型ターボプロップ機「MU-2」が、25分間の飛行をした。国産機では、YS-11に次ぎ、1機30万ドルでアメリカに輸出された。9月19日、山下汽船は、新日本汽船との対等合併を発表した。以後、海運の集約化が進む。9月25日、トヨタ自動車は、2交代制で月産3万台体制にすると発表した。9月25日、予算決算および会計令臨時特例の改正・発表があった。国産品の使用を奨励した。9月、東京のクズ屋さんは840業者で、最盛期の3分の1。9月、全国の証券会社数は559社、従業員10万870人で、証券不況にもかかわらず、戦後最高になる。

10月26日、原子力研究所は、原子力動力炉の発電実験に成功する。出力2,400kW。10月29日にはGM社の命令で運転中止。10月28日、新三菱重工業は、三菱日本重工業、三菱造船との合併契約に調印した。翌年6月1日合併。10月31日、日銀は、ニューヨーク連邦準備銀行と貸付予約方式で、1億5,000万ドル双務通貨協定に調印した。いわゆるスワップ協定である。10月31日の発表によれば、10月の不渡り手形は、戦後最高になる。届け数8万6,190枚。

11月1日、大蔵省は、にせ札横行(21都道府県で25種・342枚)に手をやき、新千円札を発表した。11月2日、大蔵省は、貿易外取引管理令を公布する。貿易・為替の自由化進む。11月

10日、三重県鈴鹿サーキットで、オートバイ世界選手権第1回日本グランプリ大会が開かれる。内外の名ライダーと15万人の見物客が集まる。50cc、125cc、250cc、350ccの4クラスとも1位から3位までを日本のメーカーが独占。オートバイ王国・日本の実力を、日本人の目の前で実証した。11月12日、閣議は、翌年4月1日の、8条国移行と観光渡航の自由化を承認した。11月13日、政府は、社会党の質問状に、アメリカ原潜の寄港は条約上当然であり、ノーチラス号には核装備がない、と回答。11月21日、第30回衆議院総選挙で、自民283、社会144、民社23、共産5、無所属12の議席が決定。投票率は、79.14%。解散時の自民党議席数は286であったから、国民の多くが自民党政権の継続を望んだことになる。石橋湛山、片山哲の首相経験者をはじめとしたベテランが落選し、小淵恵三、西岡武夫、橋本龍太郎の「親譲りの20代トリオ」など若手が当選・進出した。新旧交代の時代を迎えた。11月22日、ケネディ大統領暗殺される。11月29日、産業構造調査会は、解放経済化の産業構造のあり方につき政府に答申した。官民協調方式の採用、国際競争力の強化などを内容とする。

12月9日、第3次池田内閣成立。池田首相は、物価上昇を防ぎつつ、所得倍増に邁進する意志を表明した。12月20日、川崎汽船、飯野汽船の合併調印。海運業の集約化終わる。翌年4月1日に、日本郵船、昭和海運、山下新日本汽船、ジャパンライン、大阪商船三井船舶、川崎汽船の6グループが一斉に発足した。10月28日、新三菱重工、三菱日本重工業、三菱造船の合併契約が結ばれる。戦後最大の合併である。翌年の6月1日に三菱重工業が発足する。資本金791億円の巨大企業である。

本年の主な出来事。兼業農家が全農家の4割を超える。農業人口・戸数の減少進む。三ちゃん農業が全盛である。2月の衆議院予算委員会で使われて以来、「三ちゃん農業」が流行語になる。父ちゃんは出稼ぎ、残った母ちゃん、じいちゃん、ばあちゃんの「三ちゃん」で農業をする。道路建設ラッシュで、陸運が産業の大動脈となる。マイカーも増える一方で、「一姫二虎三ダンプ」という言葉が流行する。運転に注意する対象が、まず女性運転手、次に飲酒運転、そしてダンプカーである。本田技研が、四輪乗用車「S500」を発表する。二輪車部門では名を馳せていた本田技研の自動車部門の基礎を築いた自動車である。三種の神器の普及率は、白黒テレビ88.7%、電気洗濯機66.4%、電気冷蔵庫39.1%。白黒テレビは、低所得層にまで普及している。電気洗濯機は、中所得層、電気冷蔵庫は高所得層で普及が進んでいる。この年、カラーテレビの価格が20万円を割る。テレビの普及も、翌年10月からのオリンピックを控えて一段と高まり、白黒テレビ1,600万台、カラーテレビ5万台を売りあげる。日本経済新聞が、「量から質の広告時代」という記事を掲載した。内閣広報局の、広告にかんする世論調査では、広告が消費者に役立つとの解答が82%もあった。自転車の生産が、黒塗りの実用車中心から、カラフルなスポーツ車・軽快車に転換する。年間生産300万台を超えている。400万台を超えるのは、1968(昭和43)年で

ある。下取りの価格は、靴下 50 円（150 円以上のものを買う時）、靴 200 円（同 750 円以上）テレビ 3,000 円（同 4 万円以上）である。十条キンバリー、ナショナル住宅、サミットストアなどが設立された。

本年に発売された主な電化製品。電気蚊取り器「フマキラー・ベープ」400 円、コーヒーメーカー「パーコレーター」3,200 円・「サイホン式」3,000 円。オールトランジスタ・ステレオ、スチーム式加湿器、自動脱水洗濯機など。

(2) 社会・交通・教育

1 月 1 日、交通違反の処理を敏速化するために、東京をはじめとした 10 大都市で切符制が採用される。1 月 8 日発表の内閣広報室の世論調査では、94%の人が来年の東京オリンピック開催を知っていた。しかし開催日が 10 月であることを知っていたのは、18%であった。だが準備は着実に進められていく。1 月 10 日、厚生省は、島田療養所と琵琶湖学園を、サリドマイド障害者の特別医療保護施設に指定する。1 月 21 日、文部省は、高校生急増対策を策定した。1965（昭和 40）年度は、1960（昭和 35）年度比 90 万人増である。1 月 21 日、大阪府は、スモッグ情報を始める。1 月 29 日スモッグ警報第 1 号を発令した。1 月 23 日、北陸地方の豪雪で、北陸・上越両線が全面運休。1 月 29 日、政府は、日本海側の記録的大雪で北陸豪雪非常対策本部を設置した。富山、石川、福井、新潟の 4 県を中心に、死者 156 人、行方不明者 9 人、被害額は、農林関係 500 億円、国鉄 52 億円、バス・トラック 28 億円など。なお本年末から翌年にかけても日本海側は大雪に見舞われたが、前回の教訓を生かし、大きな混乱はなかった。1 月、厚生省は、今春より児童館を建設すると発表した。

2 月 10 日、門司、小倉、八幡、戸畑、若松の 5 市が合併し、人口 105 万人の政令指定都市・北九州市が誕生した。2 月 16 日、水俣奇病研究班の入鹿山且朗・熊本大学教授は、熊本大学の研究発表会で、水俣病の原因が新日本窒素の工場廃液であることを公表した。これ以後新日本窒素側は、患者側との和解の道を模索しだす。2 月 20 日、厚生省は、重度精神薄弱児の収容施設を、各都道府県に設置すると発表した。2 月 28 日、全国農民総盟が結成。2 月、警視庁は、少年補導員制度を発足させ、街頭補導を強化すると発表。11 月スタート。

3 月 8 日、厚生省は、サリドマイド奇形児出生問題で中央薬事審査会に医薬品安全特別対策部会を設置した。3 月 14 日、世界保険機構が世界的におこなった白血病調査で、広島と長崎の被爆者に発病率が高いことが判明した。被爆者援護法が制定されるのは、1994（平成 6）年である。3 月 21 日、警視庁による深夜喫茶などの摘発が 1,880 店にものぼった。3 月 30 日、新幹線が、時速 256 km という、鉄道では世界第 2 位、電車では世界第 1 位の速度記録を達成した。新幹線は、翌年 10 月 10 日のオリンピック開催前の運転開始を目指し、急ピッチの建設が進んでいる。

合わせて羽田空港の拡張，首都高速道路の建設，一般道の改修も進んでいる。3月30日，先天性異常児父母の会が創立総会を開く。3月31日，小児科学会は，小児がんが，30年で3倍との発表。3月31日，東京の入谷で村越吉展ちゃん4歳が誘拐され，身代金を奪われる。4月25日，警察庁は，犯人の声をラジオとテレビで一般公開する。1965（昭和40）年7月3日，小原保を逮捕する。3月，東京都内63ヵ所に，全国初の公立学童保育所が設置された。3月，団塊世代の第1陣が高校入試を迎え，前年度を40万人も上回る120万人が進学した。都立高校は6.25倍の難関になる。

4月1日，高校で，女子の家庭科（4単位）が必修になる。4月1日，文部省は，小学校1年生に教科書を無料配布した。1965（昭和40）年4月1日，小学校5年生まで拡大する。4月1日，NHK学園創立。広域通信制の教育機関ができた。4月25日，初の横断歩道橋が大阪駅前に完成した。9月10日には東京の五反田駅前に完成。4月27日，車内暴力取り締まりのための鉄道公安機動隊発足。4月，厚生省は，新薬に，催奇形作用の動物実験を義務づけた。春，東京医科歯科大学の齊藤洋三助教授は，わが国初のスギ花粉症を報告した。4月，新大学生の必需品購入費は3～5万円。

5月1日，警視庁は，新道路標識を実施した。国連標識を大幅に使用したものである。5月1日，東京都清瀬市に，国立療養所東京病院付属リハビリテーション学院が開設した。人口の高齢化にともない，増大する脳卒中患者のリハビリの拡充が要請されている。5月1日，埼玉県狭山市で，女子高校生・中田善枝が誘拐される。4日に遺体が発見される。23日に部落青年の石川一雄を逮捕する。狭山事件である。5月4日，厚生省は，初の『児童福祉白書』で，非行少年や人工妊娠中絶の増加など，現状は危機的状態であると発表した。5月27日，帝国ホテルで，従業員27人が集団赤痢にかかっていることが判明。5月28日，閣議は，小・中学校の生徒数減少で，1学級を50人から45人にすることを決定。5月，作家の水上勉が，「拝啓，池田内閣総理大臣殿」を『中央公論』6月号に発表した。重症心身障害児対策に，自分が年間支払う税金1,100万円より少ない400万円しか使われていないとして，障害者対策を訴える。この時期に，伴淳三郎らの芸能人による，身障者のための「あゆみの箱運動」が進められた。7月，厚生事務次官通達の「重症心身障害児療育実施要項」がつくられ，少し改善される。1970（昭和45）年，親の会の努力で，議員立法「心身障害者対策基本法」が制定された。障害者は，戦前は兵力として，戦後は労働力として利用できないとして，切り捨てられてきたのである。改善されたといってもまだ，高度経済成長政策の矛盾を隠蔽するための福祉政策でしかなかった。福祉施設の大半は，慈善事業の流れをくむ私的な経営者の手にゆだねられていた。1976（昭和51）年になり，重症心身障害児施設が全国で1万3,000床整備されるようになり，数のうえだけでだが希望者が全員入所できるようになった（川上武，戦後日本病人史，469～483頁）。

6月7日、最高裁は、離婚原因を作った側からだされた「性格の不一致で離婚を認めない」との新判断をした。6月8日、京都大学は、自殺のおそれのある学生が全体の2%に当たる160人、劣等感・不安感に悩む学生は全体の20%と発表した。6月14日、東京大学総長の茅誠司らの提唱で「小さな親切運動」が始まる。6月20日、観光基本法が公布・施行された。翌年の東京オリンピックに向け観光客の来日を促し、観光資源の保護・育成を図った。11月12日には閣議で、観光渡航自由化が承認された。翌年4月1日実施。6月、東京都内の中・高校生の間でシンナー遊びが流行。睡眠薬遊びの取り締まりが強化されてから、はやり始めた。

7月1日、6大都市で、長時間路上駐車に罰則適用を開始した。7月11日、老人福祉法公布。老人の無料健康診断、老人ホームへの収容、老人福祉施設設置、「老人の日」(1966(昭和41)年「敬老の日」と改称)などが定められる。7月15日、名神高速道路栗東一尾崎間74.1kmが開通する。日本初の高速道路である。1965(昭和40)年7月1日に全面開通する。7月、東京の赤羽団地に、貸し自動洗濯機が登場した。洗濯から乾燥までオートマチック方式で、独身者ばかりでなく主婦にも人気。

8月1日、老人福祉法が施行された。8月3日、厚生省は、平均寿命を、男66歳、女71歳と発表した。8月15日、政府主催の第1回戦没者追悼式が、日比谷公会堂でおこなわれた。天皇・皇后出席。第2回は靖国神社、第3回以降は武道館でおこなわれる。8月22日、少年工員のたばこの不注意から、池袋西武百貨店で火事がおきる。死者7人、負傷者23人。8月24日に、残品や冠水商品の安売りに5万人が押し寄せる。百貨店とお客の、商魂のたくましさを示す出来事である。8月29日、東京都公衆浴場商業協同組合は、前年度値上げした料金である大人19円を25円に、子ども8円を10円に値上げすることを要求するデモを、翌日にかけておこなった。9月から大人は23円になる。

9月1日、国鉄は、列車自動停車装置(ATIS)の使用を開始した。1966(昭和41)年4月20日に全線で使用を開始する。9月5日、地下鉄京橋駅に停車中の車内で時限爆弾が爆発し、乗客10人が負傷した。犯人の草加次郎は、次が10日と予告し、不安をよんだ。島倉千代子、吉永小百合らに、爆発物や強迫状を送るなど、草加次郎事件が、いたずらを含めて続出した。犯人は未逮捕。9月12日、教育課程審は、幼稚園教育の改善を答申した。しつけと道徳に重点を置く。9月12日、NHKはBGを放送禁止用語にする。BGに代わる言葉として、女性週刊誌が募集したOLという言葉が使われるようになる。9月19日、国家公安委員会は、警察庁の警察官増員計画を承認した。1970(昭和45)年までに約4万3,000人増やし、総数を18万人にする。

10月1日、国税庁は、賃金上昇で納税人口が68%に増大したと発表した。10月5日、北京で日本工業展覧会が開幕した。10万点、17億円の機械類が並んだ会場は、大盛況であった。初日に30万人が押し寄せた。電池で動くおもちゃ、万能耕耘機、時計、テレビなどに人気が集まっ

た。10月8日、マスコミと青少年に関する懇談会（総理府総務長官の諮問機関）の初会合が開かれた。10月22日、運輸省は、個人タクシー752台の新規営業を許可した。年内4,000台の方針である。10月31日、国鉄枕崎線の、枕崎—西穎谷間20.2キロが開通した。7駅は無人駅だが、年間9,000万円の赤字線である。10月、文部省は、非行防止対策として、学校と警察の連絡強化を通達した。警視庁広報室調べでは、東京への家出少年の数は2万2,788人（女子7,072人）。10月、国民健康保険で、世帯主の医療費7割給付が実施。10月、運転免許取得者数1,500万人を突破し、1,621万人。対人口比16.9%。

11月9日午後3時15分頃、三井三池鉱業所三川坑で炭塵爆発がおき、死者458人、重傷657人の被害がでた。斜陽の底に落ち込んだ炭鉱現場での、生産増大と経費削減の矛盾がおこした事故である。時代の影の部分で、同日に、大量殺戮をひきおこした。保安には金をかけている炭鉱であったが、労使争議の影響で労使関係が悪く、高度な保安設備が活用されなかったという指摘もされた。だが闘争前には、12台のベルトコンベアにたいして12人が原動機当番として炭塵の清掃にあたっていたが、闘争後は合理化を理由に1人になった。炭塵が清掃されずに、ベルト原動機付近の摩擦熱か電気スパークで引火し、爆発したものと判明した。事故で生き残っても炭酸ガスに中毒すると、長期の後遺症に悩むことになる。三井三池鉱業所は、1997（平成9）年3月29日に閉山する。11月9日午後9時50分頃、横浜市鶴見区で、電車の二重衝突がおき、死者161人、負傷者120人にもものぼった。鶴見事件である。極限まで膨張・複雑化した大都會の交通網と、人間の限界にさらされる注意力のせめぎ合いがおこした事故である。

12月2日、大阪港で、スモッグのため防波堤に観光船が衝突した。12月4日、山陽スコットは、ティッシュペーパーを発表した。12月8日、プロレスラーの力道山が、赤坂のキャバレーでやくざに刺され、15日死亡する。外人プロレスラーの反則に耐えぬき、最後に空手チョップで、巨体の外人をリングに沈める力道山の姿に、国民は溜飲をさげている。その日本人のヒーローが死んだのである。12月21日、教科書無償措置法が公布された。義務教育の教科書の無料配布、各教科1種の広域採択制、教科書出版企業の指定制が始まる。

本年の主な出来事。この年、夫婦共稼ぎが目立ちはじめ、団地族の間に「カギっ子」が登場した。地方からの中卒者を運ぶ就職列車がピークを迎える。全国で7万8,000人を運んだ。

(3) 食 料

1月18日、政府は首相裁断で砂糖の自由化方針を決定した。8月31日実施。自由化率92%となる。3月、文部省の通達で、学校給食にマカロニ、スパゲティ、麺類が採用されることになる。3月、コップ式熱かん清酒機、缶ビール自販機が開発され、東京や大阪で自販機酒場が流行する。自動販売機は、前年の1万台が、1965（昭和40）年には29万台にも増大する。労働力不足への

対応、テンポの速い生活にあった手軽さが原因で拡大する。4月1日、文部省は、義務教育学校の全生徒にミルク給食を実施することにした。4月13日、東京の築地中央卸売場は、バナナ輸入自由化でバナナの競り売りを開始した。1941（昭和16）年以来の、22年ぶり。4月27日、サントリーは、ビン詰め生ビールを発売した。サッポロビールやアサヒビールも続く。加熱処理をしていない「純生」は、やはりサントリーから1967（昭和42）年に発売される。4月、梅酒など果実酒12種の自家製造が自由となる。ただしどぶろくは依然禁止されたまま。4月、立石電気（現在のオムロン）は、多能式食券自販機および紙幣両替機を開発した。5月、ケロッグ社と技術提携した味の素は、6大都市で「コーンフレーク」（1箱100円）を一斉発売した。栄養満点なアメリカ式朝食として子供を中心にブームになる。種類や数の多い、造形的趣向にまでこだわったアメリカ式のおまけの存在も人気の原因であった。6月1日、農林省は、缶詰へのJASマークの付与を決定した。6月3日、大阪生まれのたこ焼きが東京に進出した。6月8日、文相は、脱脂粉乳の給食実施を全国教育委員長に要請した。6月29日、農林省は、前年漁獲量686万tで、世界一と発表した。

7月5日、ロンドンの国際捕鯨委員会は、年間捕獲量1万頭、シロナガスクジラとザトウクジラは全面禁止すると決定した。南極捕獲枠の41%にあたる。7月16日、閣議で、生産者米価150kg1万3,204円と決定する。7月、日清食品から即席焼きそばが発売になった。即席麺が季節に左右されない商品となる。東洋水産の和風めんの発売もこの年である。8月、プラスチック製の卵入れ「卵パック」が登場する。8月、森永乳業は、世界初のLPG冷凍車を完成した。9月、キッコーマンは、トマトジュースをデルモンテ印で国産化し、販売を開始した。10月、みそが量り売りから小袋入りに移行しはじめる。

本年の主な出来事。米の生産が1,281万2,000t。水穂玄米10aあたり収量400kg。米価975円。本年度産麦は71万tで、明治以来の凶作。味の素ゼネラルフーズは、粉末のインスタント・プリンを発売した。築地市場の冷凍魚入荷が、5年で3倍になった。静岡の浜名湖で、カキのいかだ式養殖がスタートする。山口県でアワビの養殖、瀬戸内海でモデル養殖漁業（栽培養殖）が始まるなど、養殖の関心がさらに高まる。ハマチの養殖も、全国で5,000tの生産量を記録した。宮城県と愛知県の農業試験場が、水稻品種「ササニシキ」と「日本晴」をそれぞれ発表した。ホームパーティという言葉とともに、日本タッパーウェアのポリエチレン樹脂容器「タッパーウェア」が登場した。

(4) 住 宅

1月、ダウ化工は、発砲スチロールをなかにはさんだ化学量「スタイロ畳」を発売した。1月31日、建設業24社が、プレハブ建設協会を設立。2月27日、住宅公団の6団地2,755戸に、応

募が8万通を突破。公団発足以来の最高を記録。2月、大阪市西成区に、保育所を併設した市営住宅の建設が始まる。3月22日、建築生産協は、プレハブの促進を建設相に提言した。3月、不動産業界は、「徒歩1分は80m」などの基準を定める。5月、国税庁によると、宅地価格の最高は、東京の銀座の三愛前で、3.3m²当たり350万円。7月11日、新住宅市街地開発法が公布される。人口集中に対応する都市周辺地区の開発を目指す。7月16日、建設基準法が改正され、建築物の容積、高さなどの制限が緩和された。7月、全国で別荘づくりが盛んになる。村ぐるみ、県ぐるみの「別荘用地」開発も進む。長野県東筑摩郡の麻積村はその第1号である。業者を介入させず、自然を壊さないで土地を有効に使うため、村の土地・1坪当たり地代40円でスタートした。麻積方式として有名になる。早い時期の村おこしである。8月20日、首都圏整備委員会は、茨城県の土浦、阿見、古河、総和地区を、新たに市街地開発区域に指定した。住宅地が、東京から離れていく。9月28日、大阪の千里ニュータウンの公団住宅第1号である津雲団地の建設が始まる。翌年8月18日入居開始。10月13日、建設省は、新住宅建設7ヵ年計画を発表した。1970(昭和45)年までに1世帯1住宅の実現を目指して、7年間に政府施策住宅約320万户を供給するという内容である。10月20日、埼玉県草加市の松原団地の入居が完了した。戸数5,926戸、面積17万1,000m²で、当時の住宅公団最大であった。12月30日、東洋陶器(現在のTOTO)は、わが国初のバスルーム・ユニットをホテルニューオータニより受注する。1966(昭和41)年11月一般アパート用を発売する。

本年の主な出来事。東京の新宿の伊勢丹が、デパートで初めて家具売り場にハウジング相談コーナーを開設した。洗面化粧台、鋳鉄ホーロー浴槽など、水回り備品の開発が進む。台所に、小さな穴の空いたパンチングボードが登場した。しゃもじ、まな板などを吊すために使用され始める。秋田木工のロッキングチェア(6万5,000円)が、美空ひばりと小林旭の新居におかれていることが、雑誌のグラビアで紹介され、話題になり、ヒット商品となる。

(5) ファッション

夏、セパレートの水着が人気。レジャー・ウエアも人気。メッシュのネクタイが全盛になる。オリエンタル調パターン、ストライプも流行する。ケミカルシューズが、ほとんどビニール製品に切り換えられる。8月22日、東洋レーヨン(現在の東レ)と帝人は、翌年度春夏基調色「オリエンタルルック」を共同開発した。9月、郡是製糸(現在のゲンゼ)は、ランブルーフ加工のシームレス靴下を開発した。翌年1月13日、ペットネームを「パランス」と決定した。9月、東京の女子事務員のうち、口紅をつけていない人7.7%、白粉をつけていない人22.1%であった。

本年の主な出来事。ワイシャツの多サイズ化が始まる。合繊メーカーは、洋服のTPO(時・場所・目的)を提唱する。外国からの客を迎えるようになり、国際感覚での着こなしをしてもら

おうというキャンペーンである。本音は、何回でも着替えてもらえれば儲かるという魂胆である。冷暖房の完備、繊維の多様化などにより、時と場所により着替えるほうが、生理的にも、視覚的にも気分が良いようになっていたので、キャンペーンは成功した。三菱レーヨンが、子供服「現代っ子ルック」を発売する。化粧が、ピンク系からオークル系に移行する。理髪店に、男性用ビューティー・ルームの特設が盛んになる。男性化粧品が前年比5割売り上げ増。合成洗剤の生産量が固形石鹸を追い越す。和服ブームがおきている。女子大生の卒業式スタイルに取り入れられる。六本木カラー（オリーブ、モスグリーン）のトレンチコート流行。帝人のフラワーモードと東レのフルーツカラー流行。西武が、初のプレタポルテ・ショーを開催する。高級既製服の時代が来る。

(6) 文化・レジャー・スポーツ

1月、大日本文具（現在のぺんてる）は、水性インキ「サインペン」（通称）を定価50円で発売する。携帯性と色彩の鮮やかさで、翌年に爆発的なサインペン・ブームがおきる。1953（昭和28）年の「マジックインキ」とならぶヒット商品となる。2月2日、大山康晴は、将棋5大タイトルを独占した。2月、文部省は、男女3,000人を対象に人気スポーツの調査をおこなう。トップは野球の17%。「球場には1千万の観客、テレビには2千万のファン」といわれたのが、野球である。連休最初の4月28日、上越線の土合駅に、2,500人の登山客とスキーヤーが押し寄せた。4月30日、ミス・メガネを選ぶ全国大会が開かれる。コンテストが流行となり、メガネがオシャレのひとつになったのである。4月、マイカーにアクセサリをつけるのが流行する。5月26日、大鵬が、大相撲史上初の6場所連続優勝をする。この年の流行語に「好きなものはもちろん巨人、大鵬、卵焼き」。5月、川崎市に、オールナイトの映画館が誕生した。6月30日、モデルガン・ブームのなか、弾丸の飛び出す危険なピストルもあるので、警視庁が、国産・輸入の11種類を製造販売中止にする。

7月14日の日曜日、湘南の江ノ島・片瀬25万人、逗子・葉山25万人、鎌倉15万人が押し寄せた。カミカゼ・レジャーである。9月18日、海老原博幸はボクシング世界フライ級選手権を獲得。前年にファイティング原田が奪われたタイトルを、1ラウンド2分7秒で奪い返した。10月、東京で、飼い犬に衣装を着せて散歩することがはやる。12月、東京の芝に104レーンの世界最大のボウリング場がオープンした。ボウリング・ブームが続く。全国のボウリング場は48ヵ所、1,419レーン。

本年の主な出来事。レジャー・ブームが続く。熱海は、前年比8%増の150億円を稼いだ。北アルプスは前年比15%増の50万人の人出。民宿もブームに乗ったが、サービスが追いつかない状態。伊藤映貞商店（現在のイトウ）は、リリアン編みの「ニッチング」（5円）を販売した。

ダイヤブロックやレゴなど、プラスチックの積み木が初めて登場した。手帳ブームで、年間発行高が3,000万部に達する。東京オリンピックを控え、英会話学校が大にぎわい。英会話の本やソノシートなども爆発的に売れる。ヨーヨー・ブームがおきる。1932(昭和7)年のリバイバルといわれている。東京都内の古本屋は全部で830軒、そのうち101軒が神田に集中。

貸本屋が激減した。激減の原因は次のようなことがあげられる。『鉄腕アトム』などテレビでタダで漫画が見れること。『少年キング』、『少女フレンド』、『マーガレット』が創刊され、先行していた『少年サンデー』、『少年マガジン』と合わせて週刊漫画雑誌5誌が揃ったことである。さらに菓子に漫画のシールなどのおまけが付くことで、駄菓子屋の数まで激減した。貸本屋と駄菓子屋が激減したことは、子どもの文化を変化させた。駄菓子屋や貸本屋がある裏路地と店先との間にできた空間が、子どものインフォーマルなサロンであった。ガキ大将を中心とした遊び場として、大人から相対的に独立して、子ども文化を自力で培う空間として機能していた。その空間が消滅することで、子どもは大人社会に飲み込まれ、自立できずに、軋轢を生み出した。

(7) 音楽, テレビ, 映画

歌謡曲のベスト・テンは次のとおりである。舟木一夫は、『高校三年生』(新人賞と作詞賞・丘灯至夫)の大ヒットに続き、『修学旅行』、『学園広場』と、立て続けにヒットを飛ばす。前年ヒットした『若いふたり』に始まる青春演歌ブームの全盛期を迎えたのである。しかし梓みちよの『こんにちは赤ちゃん』がレコード大賞を獲得し、フランク永井の『赤ちゃんは王様だ』が歌唱賞を獲得した。青春演歌ブームは、ファミリー・ブームのなかに吸収されていき、1960年代歌謡の大きな流れを作りあげていく。坂本九の『見上げてごらん夜の星を』が作曲賞(いずみたく)を獲得。6月22日、坂本九の『SUKIYAKI(上を向いて歩こう)』が、アメリカで100万枚突破。全米レコード協会より日本人初のゴールデン・ディスクを贈られる。フランスやドイツでもヒットし、世界69ヵ国で約1,300万枚の売り上げを記録した。三波春夫の『東京五輪音頭』は、オリンピック・ブームのなかでヒットした。ダニー飯田とパラダイス・キング・九重祐三子『シェリー』、植木等の『ホンダラ行進曲』、西田佐知子の『エリカの花散る頃』と『故郷のように』もヒットする。新人賞に三沢あけみが、『島のブルース』と『私も流れの渡り鳥』で選ばれる。

NHKの「BSあなたが選ぶ時代の歌」は次の11曲である。『こんにちは赤ちゃん』、植木等の『ハイ!それまでよ』、カスケーズの『悲しき雨音』、『見上げてごらん夜の星を』(NHKの「BSあなたが選ぶ時代の歌(2004)」の選曲結果で、第31位になる)、ザ・ピーナッツの『恋のバカンス』、田辺靖雄と梓みちよ/パラダイス・キングの『ハイ・ポーラ』、一節太郎の『浪曲子守歌』、『高校三年生』(NHKのBSあなたが選ぶ時代の歌(2004)の選曲結果で、第33位になる)、三沢あけみ&和田弘とマヒナスターズの『島のブルース』、三田明の『美しい十代』、『東京五輪音

頭』である。

歌謡曲は時代の雰囲気を変えていく（村瀬学，なぜ「丘」をうたう歌謡曲がたくさんつくられてきたのか，82～89頁）。『こんにちは赤ちゃん』で歌われる母は，団塊世代の新しい母である。このホームソングのような歌を歌った梓みちよも20歳になったばかりの，生活のニオイが全くない歌手であった。今までに歌われた参拝する母でも，弔う母でも，田舎で待つ母でもない。ひたすら手元で子供を見つめ，過剰に子供に望みを託し「期待する母」である。そしてこの「教育ママ」が，ニュー・ファミリーを形成していくのである。しかしその赤ちゃんが5歳になった1968（昭和43）年，ザ・テンプターズの歌う『おかあさん』のなかで，おかあさんは，「いつまでもいつもいい子でいてね」としかいいわない「ママ」になった。1969（昭和44）年，赤ちゃんは思春期になり，もう教育ママはいらないと，カルメン・マキの歌う『時には母のない子のように』となった。決別される母の誕生である。1971（昭和46）年森進一の『おふくろさん』で歌われる母は，「世の中の傘になれよ」，「強く生きる」，「愛をともし」と教えてくれた教育ママだが，空にも花や山にもどこでも存在する，つまり実在のない不思議な母となった。故郷としての母の姿である。『こんにちは赤ちゃん』で歌われる母は，寿退社をはたし，団地に住み，「二人の愛のしるし」の小さな手，つぶらな瞳，泣き声までも感動しながら，幸せな家庭を夢みる母親である。ひたすら手元で子供を見つめ，過剰に子供に望みを託し，男の赤ちゃんなら学歴社会を勝ち抜き，女の赤ちゃんならかわいいお嫁さんになることを「期待する母」であった。大きな期待と夢を赤ちゃんにもてる，豊かな母親像が歌われている。

『高校三年生』にも希望と期待，惜別と諦めが詰まっているので流行したのである，という解釈がある（村瀬学，なぜ「丘」をうたう歌謡曲がたくさんつくられてきたのか，105～106頁）。高度成長にともない企業内部の競争も熾烈になり，有利な立場をえるための学歴競争も激しくなった。だから親たちにとり，子どもの高校三年生という時期は，自分たちが果たせなかった立身出世を子どもに果たさせ，幸福な生活を実現させられる可能性に満ちた年次でもあった。親の期待を背負った高校三年生の多くにとっては，これから大企業に入社する前の，希望と不安の年である。「遠い空に夢のはばたく」年である。高校進学率は66%だが大学進学率は16%であるから，少数の高校三年生にとっては，さらに出世するために大学に進学する前の年であった。このように『高校三年生』，『修学旅行』，『学園広場』は，当時の若者と親にとり，希望と不安がつまった思い出の多い曲である。そしてこの歌が現在でも懐かしがられる理由は次のように解釈できる。『高校三年生』は，むかし存在した「泣いたこともある，怨んだこともある」仲間だからこそ，「なつかしく思い出す」「ぼくら」を弔う歌である。「手を取りあった」が「離れ離れになるぼくら」を歌っている。そして日本社会が昔もっていた「懐かしい共同性」を喚起する歌である。「ぼくら」を歌うことで，「ぼくら」を懐かしむとともに，「ぼくら」がなくなったことを確認するのである。

その二重性が長い人気の秘密である。集団主義から個人主義へ、急速に移行した現在にあって、まだ集団主義の残滓を確認する歌である。

ヒットした三田明の『美しい十代』は、「君」と「美しい十代」を発見した記念碑的歌である(村瀬学、なぜ「丘」をうたう歌謡曲がたくさんつくられてきたのか、107～116頁)。美しい十代の君は、「ノートを貸してくれ」、「励まし」、「話し合ってくれる君」である。従順で、何も言わずに、ただ下を向いて待っている「あの娘」ではない。結婚を約束した、成熟した女としての君でもない。初めて異性として意識しはじめる同級生としての君である。明確に「異性」として意識する前の、だが「無性」でもない段階の君である。「白い野ばらを捧げる」と「瞳があかるく笑う」君であり、「励まし合う」相手、「2人の胸にきれいな夢を飾る」相手でもある。「話し合ったらつきない」君だが、紅い夕陽の沈む頃には、「明日またねと手を振り」さよならをしなければならない君でもある。このような「君」は、実在しない君である。仮装体験された君である。憧れの君を夢想する美しい十代なのである。

テレビでは、1月1日、フジテレビで、明治製菓提供の『鉄腕アトム』の放送が開始された。1966(昭和41)年12月31日まで続く。最高40%の高視聴率を記録した。アニメによる連続テレビ漫画の国産第1号。アニメ時代の開幕である。茶の間に鎮座ましますテレビが放映するアニメを、もはや親たちは「漫画は俗悪である」として拒否できなくなった。実際見てみると、映像表現は丁寧で、ストーリーも感動的であり、親と子どもが共に見れる漫画として、市民権を得ていく。続いて10月に江崎グリコ提供『鉄人28号』、11月に森永製菓提供『狼少年ケン』の放映が始まる。チョコレート、ガム、キャラメルなどの菓子業界における大量生産・大量消費のための大衆広告の体制が整ったのである。菓子と漫画とおまけが合体するという、おやつ革命がおきたのである。そのいきさつは次のとおりである。明治製菓のマーブルチョコレートが1961(昭和36)年に売り出され、人気を博した。次の年の11月森永製菓のパレードチョコレートは、動くバッジなどのおまけをつけ、人気を奪い取った。その対抗策として、本年に明治製菓のチョコのおまけに「鉄腕アトム・シール」がつけられた。それと11月から始まった江崎グリコの菓子のおまけ「くっつきワッペン」(キャンペーン期間中に3億枚作られた)は人気があった。特に「鉄人28号ワッペン」は、子どもたちの人気を二分した。7月から9月(8月締め切りが延期)締め切りの「鉄腕アトム・シール」への応募総数は、500万通に達したという。このようにおまけブームの対象が、野球道具や本からキャラクターのシールやワッペンに移ったということは、自己調達型のおまけ(例えば紅梅のミルク・キャラメルのおまけには、野球用具や野球の情報誌、カメラなどがついていて)の時代を終わりにするほど、親が豊かになったことを示している。野球道具などは、親が簡単に買ってくれるのである。高度成長による家計のうおいは、まず茶の間にテレビを置かせ、子どもに大きな影響を与えていく。さらにシールやワッペンがブームになっ

たことは、子どもの浮遊感のあらわれであるという、興味ある指摘もある（芹沢俊介，戦後おまけブームの仕組み，子ども昭和史 おまけとふろく大図鑑，別冊太陽，52頁）。小さく薄いシールやワッペンなどは、好きなところに持っていったり，貼れたりはがしたりできる。他人を威圧するような存在感はないが，自分や相手の気分に合わせて自由に取りかえがきく。このことに子どもたちは無意識のところで気がついていたのではないかと，主張するのである。このようなアニメ映画とおまけの競合は続く。11月丸美屋提供の『エイトマン』が放映される。翌年4月に「エイトマン・シール」が登場する。9月には『鉄腕アトム』は，アメリカで『アストロ・ボーイ』のタイトルで放送され，人気を呼ぶ。さらに60カ国以上で放映されることになる。4月7日，NHKテレビで『花の生涯』の放送開始（『文藝春秋』1996（平成8）年2月号の「読者5500人 史上テレビ番組ベスト100」の第7位であった）。初の大河歴史テレビ・ドラマ。最高視聴率20.2%。8月19日，邦画5社は，劇映画のテレビ放送制限を廃止した。旧作映画のテレビ放送は7年経過したもののみとすることを，映連と放送会社の間で合意。初年度は500本とする。10月4日，俗悪テレビ番組の自主規制策を審議する会議・放送番組懇談会が開かれた。10月16日には，総理府も，第1回「マスコミと青少年に関する懇談会放送部会」を開いた。11月23日，初の日米テレビ中継がおこなわれ，ケネディ大統領暗殺の速報がなされた。

本年，為替自由化で，外国テレビ映画の放送権料が急騰したため，国産テレビ・ドラマが台頭した。『図々しい奴』，『赤いダイヤ』，『男嫌い』，『女体』，『夫婦善哉』，『底抜け脱線ゲーム』，『三匹の侍』（『文藝春秋』1996（平成8）年2月号の「読者5500人 史上テレビ番組ベスト100」の第45位）など名作が多くつくられた。

映画は，キネマ旬報の順位を記しておく（関口祐子編，戦後キネマ旬報 ベスト・テン全史 1946-2002，114～115頁）。

日本映画の第1位が，日本映画監督賞を受賞した今村昌平監督，左幸子・岸輝子出演の『にっぽん昆虫記』（日活）である。女主人公とめが，圧倒的にエネルギッシュな生き方に感動をよんだ。農村から出てきたとめが，まず製糸女工となり，組織の活動家や新興宗教の信者となりながら，旅館の女中や売春婦となり，コールガール組織を仕切るまでになったが，警察に捕まる。出所してきたら娘にパトロンも組織も奪われ，そこから母娘の闘いが始まる。高度成長を突っ走るエネルギーを象徴する映画である。第2位が，黒澤明監督，三船敏郎・香川京子出演の『天国と地獄』（黒澤プロ・東宝）である。第3位が，田坂具隆監督，佐久間良子・河原崎長一郎出演の『五番町夕霧楼』（東映）である。第4位が，市川崑監督，石原裕次郎・森雅之出演の『太平洋ひとりぼっち』（石原プロ・日活）である。第5位が，今井正監督，中村錦之助・東野英治郎出演の『武士道残酷物語』（東映）である。ベルリン映画祭で，グランプリ受賞。第6位が，川島雄三監督，若尾文子・伊藤雄之助出演の『しとやかな獣』（大映）である。第7位が，羽仁進監督，

左幸子・岡田英次出演の『彼女と彼』(岩波映画)である。第8位が、新藤兼人監督、乙羽信子・杉村春子出演の『母』(近代映画協会)である。第9位が、堀川弘通位監督、小林桂樹・仲代達矢出演の『白と黒』(東京映画・東宝)である。第10位が、浦山桐朗監督、浜田光夫・和泉雅子出演の『非行少女』(日活)である。モスクワ映画祭で、金賞獲得。

外国映画の第1位が、デヴィッド・リーン監督、ピーター・オトゥール／アレック・ギネス出演の、70ミリ大作『アラビアのロレンス』である。第35回アカデミー作品賞・監督賞・色彩美術賞・編集賞・音響賞など受賞した。第2位が、アーサー・ペン監督、アン・バンクロフト／パティ・デューク出演の『奇跡の人』である。ヘレン・ケラーの物語が観客の感動をよんだ。第3位が、セルギユ・ブルギニョン監督、ハーディ・クリューガー／パトリシア・ゴッジ出演の『シベールの日曜日』である。第4位が、アルフレッド・ヒッチコック監督、ロッド・テイラー／ティッピー・ヘドレン出演の『鳥』である。第5位が、ジャン・リュック・ゴダール監督、アンナ・カリーナ／サディ・ルボット出演の『女と男のいる舗道』である。第6位が、イングマン・ベルイマン監督、マックス・フォン・シドウ／グンナール・ビョルンストランド出演の『第七の封印』である。第7位が、ピエトロ・ジェルミ監督、マルチェロ・マストロヤニ／ダニエラ・ロッカ出演の『イタリア式離婚狂想曲』である。第8位が、トニー・リチャードソン監督、リタ・トゥシンナム／ドラ・ブライアン出演の『蜜の味』である。第9位が、フランソワ・トリュフォー監督、シャルル・アズナヴール／ニコール・ベルジェ出演の『ピアニストを撃て』である。第10位が、ナンニ・ロイ監督、レア・マッサリ／ジャン・ソレル出演の『祖国は誰のものぞ』である。

日本映画の興業ベスト・テンは次のとおりであり。1963(昭和38)年4月～1964(昭和39)年3月までである。第1位が『にっぽん昆虫記』(日活)で配収3億3,000万円。第2位が『光る海』(日活)で配収3億円。第3位が『赤いハンカチ』(日活)で配収2億8,000万円。第4位が『武士道残酷物語』(東映)で配収2億7,500万円。第5位が『大盗賊』(東宝)で配収2億3,000万円。第6位が『宮本武蔵・一乗寺の決闘』(東映)で配収2億2,500万円。第7位が『五番町夕霧楼』(東映)で配収2億1,800万円。第9位が『喜劇・駅前茶釜』(東宝)で配収2億1,000万円。第10位が『新吾二十番勝負』(東宝)で配収2億700万円。

洋画は次のとおりである。第1位が『史上最大の作戦』で配収8億9,586万円。第2位が『アラビアのロレンス』で配収5億9,527万円。第3位が『大脱走』で配収5億2,722万円。第4位が『クレオパトラ』で配収4億2,678万円。第5位が『北京の55日』で配収3億3,933万円。第6位が『地下室のメロディー』で配収2億4,681万円。第7位が『シャレード』で配収2億2,650万円。第8位が『隊長ブルーバ』で配収2億4,478万円。第9位が『鳥』で配収2億501万円。第10位が『チコと鮫』で配収2億187万円。

洋画界の封切り本数は269本の戦後最高、年間配収116億8,700万円で、戦後2番目。外国映

画輸入規制が大幅に緩和されたからである。

映画観客数は、最盛期の47%になる。全国の映画館数5,700館にまで減少。川崎で初のオールナイト興業。松竹、大映、日活は無配になる。

その他芸術関連の出来事は次のとおり。1月14日、芥川比呂志、岸田今日子、仲代昇ら中堅・若手俳優・演出家29人が、文学座を脱退。文芸評論家の福田恆在を代表者に、劇団雲を結成した。2月12日小津安二郎没。10月20日、日生劇場が開場。カール・ベームが指揮するベルリン・ドイツ・オペラが、ベートーベンの『フィデリオ』を上演した。16回ものカーテンコールを記録した。12月5日、大蔵省は、外国映画の輸入制限緩和を決める。

(8) 本

本のベスト・テンは次のとおりである。山岡荘八の『徳川家康』（第1巻～第19巻）が、経営者のバイブルとしてもはやされ、第1位に躍り出てきた。サラリーマンが、人生訓、処世訓を読みとろうとして、購入した。第2位が占部都美の『危ない会社』である。高度成長にかけりがで、貿易自由化による国際競争が激化し、企業倒産が増加しているなか、いまだに泰平を信じていたビジネスマンの危機感を、センセーショナルな文句であおり、40数万部が飛ぶように売れた。2～3年前から続いている経営書ブームにのり、第2位になった。光文社の「カップ・ビジネス」の第1号である。第3位が謝国権の『性生活の知恵』、第4位が松本清張の『時間の習俗』（光文社）である。第5位が松下幸之助の『物の見方考え方』である。経営の神様の経営ノウハウに注目が集まったのである。第6位がJ. アダムソンの『永遠のエルザ』、第7位柴田錬三郎の『罔々しい奴』である。第8位林周二の『流通革命』は、中公新書第1弾である。近未来のビジネス社会を予言する本として歓迎された。第9位玉井美智子の『交換日記』、第10位堀江謙一『太平洋ひとりぼっち』である。

第49回芥川賞は、後藤紀一の『少年の橋』と河野多恵子の『蟹』、第50回は、田辺聖子の『感傷旅行センチメンタル・ジャーニィ』。第49回直木賞は、佐藤得二の『女のいくさ』、第50回は、安藤鶴夫の『巷談本牧亭』と和田芳恵の『塵の中』。

1月、『週刊少女フレンド』（講談社）創刊。5月には『週刊マーガレット』（集英社）も創刊。『週刊マーガレット』の創刊号はすべて無料、2号ではハンカチを読者全員にプレゼントという、大盤ふるまいで先行の『週刊少女フレンド』を追いあげた。少女雑誌の週刊化が始まる。少女マンガのパターンが完成した。主人公は、瞳が大きく輝く西洋人形のような少女。彼女は、王女や貴族で、何一つ不足のない生活をしているが、母か父の愛情に飢えているというパターンから始まる。波瀾万丈・紆余曲折をへて、シンデレラのように幸せな結婚をする。だが幸せになるために少女は、やさしく強い母の愛情を得なければならないのである。西洋の少女かと思まごうばか

りの無国籍性と、日本的な「母もの」との結合が、少女マンガである（石子順造，戦後マンガ史ノート，124頁）。第2次漫画ブームがおきている。2月22日、『サンケイスポーツ』創刊。3月，小松左京，星新一らが日本SF作家クラブ結成。6月，『週刊少年キング』（少年画報社）創刊。10月2日，甲府書籍雑誌商組合は，不良雑誌の発送中止を，取り次ぎ4社に申し入れた。これを機に，悪書追放運動が始まる。10月28日には出版物小売連倫理委員会は，仕入れ拒否，該当雑誌指定などを決定した。悪書追放運動が拡大した。10月30日，日本文芸社は，悪書追放運動を受け，4誌を廃刊にする。11月1日，全国の90%をしめる日本出版物小売業組合全国連合会が，不良出版物と指定した雑誌30誌の店頭販売を拒否した。11月5日，第1回野間児童文芸賞は，石森延男の『パンのみやげ話』（東都書房），中川李枝子『いやいえもん』（福音館）に決まる。

この年創刊された雑誌。日本初の本格的グラフィック誌『太陽』（平凡社）。『月刊リクルート』（日本リクルートセンター）。『ヤングレディ』（講談社）。『女性セブン』（小学館）。『小説現代』（講談社）。『大学受験・高三コース』（学習研究社）。創復刊誌96誌，休廃刊誌81誌。

(9) まとめ

政治的には，原子力潜水艦の入港に関して議論やデモがおき混乱したり，大阪と横浜の市長に革新系が選ばれたりしたが，自民党の池田内閣は安泰であった。政治的安定を支えにして，翌年のオリンピック開催に向けて，好景気が続いている。簡易保険および郵便年金積立金が1兆円を超え，それが公共投資に流れ込む。ニューヨーク連邦準備銀行と，1億5,000万ドルのスワップ協定を結び，資金が流入する。地方財政も664億円の黒字で，安定している。オリンピックのメインスタジアムとなる，千駄ヶ谷の国立競技場の大改修，代々木の屋内総合競技場本館と選手村の建設，駒沢の総合競技場の建設などが進められている。高速道路の建設，一般道の改修，羽田空港の拡張，モノレールの建設も進んでいる。新幹線は時速256kmを達成した。大工や土工は13万人不足している。「一姫二虎三ダンプ」が流行語になるほど，建設材料を積んだトラックやダンプが走り回る。翌年秋までオリンピック景気は続く。三種の神器の消費は拡大する。オリンピックをカラーで見ようと，カラーテレビも売りあげを伸ばす。

経済の自由化は進む。2月，ガット11条国に移行する。7月，OECDに加盟する。8月には，自由化率92.2%にまで達する。国際競争力の強化が要求される。7月14日から19日まで，軽井沢で，日本生産性本部，経済同友会，経済団体連合会，日本商工会議所の共催で，トップ・マネージメント・セミナーが開かれたが，具体策はでなかった。だが海運の集約化は進む。東南アジア地域での国際競争力の強化に役立ったのが，21年間にわたり支払いつづけてきた賠償金10億ドルと無償経済協力4億ドルである。それらが日本の重工業や建設業を育成した。企業の合併も進む。昭和30年代後半から合併の波が訪れ，本年997件の合併がピークであった。その象徴が三

菱重工業の合併である。中小企業基本法が公布され、中小企業の保護から、近代化と合理化の促進へと政策も変わる。中小企業数は全体の99%、就業者数は40%。合理化された中小企業が大企業を支える。大企業は自民党が守る。労働組合は社会党が守る。しかし中小企業を守る政党はない。斜陽産業である石炭産業は閉山に追い込まれ、綿業はアメリカの圧力で、生産額を縮小させられている。豊かさを実現し、国際競争に勝つために、強い企業をより大型化し、弱い企業・産業は切り捨てていく。

新産業都市13ヵ所(最終的には15ヵ所)、工業整備特別地域6ヵ所が指定された。工業を全国に分散し、人口も分散し、所得倍増を実現しながら地域格差、過疎・過密問題をも解消しようという、一石数鳥を目指した政策である。

自動車の生産は増大し、それとともに販売も拡大している。月賦販売制度を充実させるための自動車消費者金融制度が、2月にトヨタ自販から始まり、他の会社も続いた。四輪車生産台数は、100万台を突破して128万3,538台、四輪車新規登録台数も100万台を突破して117万台。個人名義の乗用車が半数あまりを占める自家用自動車(普通車・小型四輪車・小型三輪車)68万2,055台。2月に、日産自動車が、自動車生産累計100万台達成。4月には、トヨタ自動車が、業界初の、乗用車月産1万台を突破した。新車の保証期間を1年または2万kmにまで拡大するほど、品質は良くなる。本田技研が、初のスポーツカーの販売を始める。着実に自動車産業は育っている。5月に鈴鹿サーキットで日本初の第1回日本グランプリ自動車レース大会が開かれ、外車との技術格差を縮小する機会となる。観客も10万人を超え、マイカー・ブームの高さを伺わせる。世論調査でも、「将来自動車とピアノをもった生活をしたい」と考えている人は、2年前の15%から増加し、本年は29%もいる。第1種普通運転免許件数461万人にもなり、自動車普及の傾向は育っているが、問題点がある。東京近郊の日本住宅公団の入居者が常時使用している自動車のうち、勤務先の会社の所有する車が3割近くあることが調査で分かった。乗用車の公私混同的要素は強い。さらに労務者世帯の中古の乗用車(価格は30~35万円)を購入する割合が36.4%である(昭和39年度国民生活白書、218~220頁)。豊かさの象徴であるマイカーの普及は、1966(昭和41)年から急速に進むことになる。11月の鈴鹿サーキットでの第1回日本グランプリ大会では、日本の二輪車の実力を内外に示した。二輪車産業は、世界でトップクラスである。

安い労働力が、高度成長を支え、豊かさを実現した。集団就職は大規模におこなわれていた。慢性的人手不足の大都市では、労働条件は改善されている。キャノンが週休2日制を導入する。賃金も上昇する。大都市での中学卒の初任給は、他の地域の2割から3割増しである。求人率は、中学卒2.6倍、高校卒2.7倍である。3大都市圏の転入・転出数の差し引きで超過数が最大・年間60万人になった。労働力が都市に集中する。労働条件の比較的良好な大企業に就職した場合は、定着率も良かった。労働条件の劣る中小企業も、初任給を上げ、労働力確保に奔走した。24歳

未満の若年労働者にかんしては、企業規模の賃金格差は消滅している。30歳以上の中・高齢者層では、依然として大幅な格差が存在した（昭和38年度国民生活白書、6頁）。だが、労働条件が最悪といわれている中・小商店へ就職した中学卒の半数近くが数年前後で転職したり、地元に戻っている。中・小商店では、ほとんど休日がなく、店主の家族との同居が多かった。貴重な労働力確保のため、ある商店街では、集団就職者の親睦を図る機会を作ったり、父兄を東京見物に招待するなどの配慮もおこなわれた（古川隆久、昭和エンタティメント 昭和戦後史 中 経済繁栄と国際化、134頁）。人手不足のなか、24時間のセールスマンといわれた自動販売機の種類も数も急増している。高度成長、所得倍増のなかで、豊かさを実現できない多くの人びとが存在する。

都会の人手不足により、農家も雇用機会の増大で、8割近くが何らかのかたちで兼業をしている。農家所得と都市勤労者世帯所得の格差縮小も進む。勤労者世帯の所得は69万7,200円、農家世帯は62万7,200円である。その半分以上を農業以外から得ている（昭和40年度国民生活白書、74頁）。その影で三ちゃん農業が全盛である。動力耕耘機が普及し、本年181万2,000台を購入した。肥料購入額3,099万4,000円、農薬834万4,000円。農業所得も増えるが、それ以上の割合で肥料、農薬、機械の購入費が増える。農家の主婦の間に、農婦症という、肩こり、腰痛、手足のしびれ、息切れなどの慢性的症状を訴える割合が増大している。農業労働と家事労働を二重に強いられているのが、主婦である。主婦は訴える。「少しでも良い生活をしたいから、父ちゃんは出稼ぎにゆく。やっとテレビが買えると今度は別のものが欲しくなる。そのうちに主婦の体は痛めつけられてどうにもなくなる」という、全国農協婦人大会での一農婦の発言は、豊かさ意識を研究するさい、考慮しなければならない発言である（昭和41年度国民生活白書、63～64頁）。数字的に見れば農家の所得が増大し、豊かになっているようであるが、出稼ぎにでざるをえない夫の苦勞、後を守る妻と、じいちゃんばあちゃんの両親、跡を継ぎたくない子どもたちの苦勞を考慮に入れなければ、豊かさ意識ははかれない。

確かに所得は増えている。個人可処分所得は、14兆8,368億円、前年比14.7%増である。勤労所得は、32万7,500円、前年比112.3%増である。だが物価の上昇は続く。都市勤労者世帯での名目消費支出・前年度増加率は12.0%、実質消費支出・前年度増加率は5.1%である。名目と実質の乖離率は58%である（昭和39年度国民生活白書、119頁）。物価上昇に、所得の増加分がほとんど相殺されている状態といえる。特に生鮮食品の値上率が高い。キャベツと白菜に調整金があてられた。物価問題懇談会が開かれる。だが物価上昇が、豊かさを疎外している。

日本一の規模の黒四ダムが完成した。513億円の経費と167人の犠牲のもとに、7年の時間をかけてである。しかし発電方式は、火主水従に代わる。10月には、原子力動力炉の発電実験に成功する。

社会的大事故が同日におきた。11月9日、三井三池炭鉱で炭塵爆発がおき、458人が死亡。6

時間後に鶴見で電車の二重衝突がおき、161人が死亡。経済的合理性を極限まですすめた結果としての、悲惨な事故である。豊かさの基礎は、安全である。

前年度の暮れからの記録的豪雪で、日本海側は大混乱である。本年の教訓を生かして、次年度は被害を抑制することができた。

病気では、教訓は生かされていない。成人病（脳卒中、がん、心臓病、高血圧症）による死亡率が、全死亡者の半数を超える。精神病の問題が重要性をおびてきている。文部省の調査では、精神障害者124万人で、そのうち35万人は施設に収容する必要がある。だが収容施設は15万床にも満たない。水上勉が、重症心身障害児対策を訴え、やっと政府が重い腰をあげる。水俣病の原因が新日本窒素の工場廃液にあることが公表され、会社側は今までの否定や居直りから、和解の道を進もうとする。サリドマイド障害者の特別医療保護施設が指定された。被爆者は相変わらず白血病に苦しんでいる。スモッグの被害が、大阪を初めとして全国各地で甚大である。病気や公害は豊かさを疎外する。

児童に豊かさはない。初の『児童福祉白書』で、児童福祉は危機的状態にあることが指摘された。中・高校生の間でシンナー遊びや睡眠薬遊びが流行した。警視庁の調べでは、東京への家出少年の数は2万2,788人で、そのうち女子7,072人。13歳までが11%、14~15歳26%、16~17歳36%、18~19歳27%である。理由は、「仕事をしに」、「東京への憧れ」、「仕事嫌い」、「親に叱られて」、「遊び好き」の順である。非行対策、家出人対策が強化された。不良のたまり場としての深夜喫茶の取り締まりが強化された。不良の原因をなくそうと、悪書追放運動が広まった。京都大学では、自殺のおそれがある学生が2%の160人もいて、精神的な不安を訴える学生が2割もいる。団塊世代が高校に押し寄せ、高校が満杯である。高校入試はむずかしくなる。小・中学校は、クラス定員を減少し、教科書無料配布をうけるようになった。だが子どもたちは不幸である。

老人の豊かさを行政が担おうとする。老人福祉法が制定された。戦後の復興から、高度成長を続け、家族構成が激変した。農村部では過疎問題がおこり、三ちゃん農業がおこなわれている。大都市部では過密問題がおこり、核家族が増えている。そのなかで老人問題が浮かびあがってきたのである。高齢者を親族が扶養するのではなく、公的に保障することが望まれるようになったのである。その風潮のなかで行政が、高齢者にたいする責任を明言したのが、老人福祉法である。この法律により、①所得に関係なく全老人が福祉対象になったこと、②老人の入所施設の位置づけができたこと、③在宅でのサービスが位置づけられたことに意味がある。しかし行政は老人福祉の責任から逃げようとしている。最も看護が必要な痴呆老人が特養ホームに入所できるようになったのは、1984（昭和59）年からである。今でも入所の順番待ちが続く（川上武、戦後日本病人史、536~546頁）。老人に豊かさはない。

働く女性に豊かさはない。BG（ビジネス・ガール）という呼称に代わり、OL（オフィス・レディ）という言葉が登場した。それは、男性と対等に働く女性の呼称でなく、男性の補助をする女性、結婚相手としての女性の呼称にすぎない。高度成長下で、若い女性の専業主婦化は進んでいるのである。20歳から29歳の女性の労働率は、1960（昭和35）年54.5%、1975（昭和50）年42.6%と減少する（三浦展、「家族」と「幸福」の戦後史、128頁）。女性を家庭に閉じこめるために、本年から高校での家庭科が女子だけ必修となる。さらに仕事は都心、家庭は郊外という郊外化が、男女の性別役割を強化した。男性は都心で仕事や生産、女性は郊外で家事・育児・消費を担当するというライフスタイルが完成したのである。この当時の女性はもちろん男性も、このようなジェンダーにさほど疑問をもっていなかった。テレビ・ドラマで見るアメリカの中流生活のように、男は仕事に出て、女は家庭で家事・育児をし、仲良く豊かな消費生活をするのが憧れであった。1955（昭和30）年～1975（昭和50）年まで合計特殊出生率が2.00前後であったから、子ども2人と夫婦の核家族で、郊外の家に住み、しゃれた家電や家具に囲まれ、ファッションブルな生活を楽しむことは、ステータスの証でもあった。だが本年はこの団地族の間に「カギっ子」が増え、問題化する。共稼ぎが目立ちだしている。それにともない保育所は相変わらず不足している。若くして結婚し、寿退職し、郊外の家で憧れの専業主婦をしても、ローンの返済、家計の補助のために、末子が小学校に入学する頃に働きに出る。中年となった主婦にとり、仕事は安いパートしかない。彼女らの安い賃金が、高度成長を支えているのである。性格の不一致だけで離婚されなくなったが、女性にとって、豊かさは搾取されている。

このように社会的・経済的に弱い立場の病人、児童、老人、女性にとり、豊かさは遠い。

豊かさを実現するためにも、小さな親切運動が始まる。その運動は、高度成長の影で忘れられてきた「思いやり」の大切さを教えてくれた。あゆみの箱運動も進められる。年会費1,000円では、さほどの成果をあげられなかった。吉展ちゃん誘拐事件では、母親の会をはじめとして、各地で一般人が「吉展ちゃんを取り戻そう」と立ちあがった。思いやりは育っている。だが思いやりを踏みにじる事件もおきている。時限爆弾事件の草加次郎は姿を見せぬまま、吉永小百合などの有名人に100万円を要求。それをいたずらでマネた事件が、多発する。卑劣な狭山事件もおきる。

交通問題も深刻化している。本年度道路投資5,235億円で、1960（昭和35）年の2.5倍の資金が投入されているが、交通戦争は激化している。原因は、オリンピック関連設備の建設、大都市中心部での職場の急増と、住宅の都市周辺部への無秩序な拡散である（昭和39年度国民生活白書、33頁）。初のハイウェイである名神高速道路・栗東―尼崎間が開通し、2年後に全線開通する。陸運が産業の大動脈となっていく。交通事故死は増大し続けている。交通事故を減少させるために、歩行者より車を優先させる横断歩道橋が、初めて大阪と東京にできる。

豊かさの影で作られたごみは、1958（昭和33）年の1.7倍も増加した。その42.2%が焼却、残りが埋め立てである。埋め立て適地も減少している。増大するし尿の処理も、農村還元は9.4%にまで減少し、海洋投棄など望ましくない処理に任されている（昭和40年度国民生活白書、62頁）。下水道終末処理場・し尿処理施設・ごみ処理整備緊急5ヵ年計画が着手された。

電話の発展は急速である。しかし138万人が架設されるのを待っている。100人当たりの普及率は約8台で、世界主要諸国と比べると格段と少ない。1965（昭和40）年に9.9台となり、世界でやっと第17位となった（昭和40年度国民生活白書、84頁）。

高度成長を支えた人口の都市集中が、公害、交通問題、ごみ・し尿問題、通信問題などをひきおこしている。豊かさの影の部分の問題が、クローズアップされていく。

政府主催の、第1回戦没者追悼式が開かれ、天皇・皇后が出席した。戦没者を追悼することは、心の豊かさを培ってくれる。だが政府の間に、戦争肯定に向かう動きがある。漫画で戦記物がブームになる。モデル・ガンのブームがおきる。唯一の被爆国である日本に、原爆を投下したアメリカが原爆を入れようとしている。戦争は、豊かさを根底から揺るがし、原爆は全面的に破壊する。

観光基本法が制定される。外国からの観光客を増やすためにも、日本の観光施設の充実が図られていく。翌年から観光渡航自由化が始まる。観光旅行は、庶民のささやかな楽しみである。歌にうたわれたハワイなどの海外旅行は、最高の豊かさである。

食生活は豊かになった。食料に関しては、嗜好の洋風化、高級化、多様化の進展が指摘できる。肉類、乳卵類などの動物性食品の割合が増加し、穀類の消費が減る。加工度の低いものから高いものへの需要が移行している。インスタント・ラーメンは進化し続けている。さらに果実や酒などの嗜好品の消費が増加している。ホワイトリカーと呼ばれはじめた焼酎を使った果実酒の製造が、ほぼ自由化になった。だが先進国が自由化しているワインやビールの自家製造は、いまだ自由化にならない。外食が、ここ5年間でほぼ2倍に達した。エンゲル係数は確実に減少傾向にある。都市世帯38.5%、農村世帯37.3%である。穀物の消費量が減っているからである。だが家計費に占める食料費支出の額は、ほとんど変わっていない。米が1,281万tの生産。ほぼ平年並み。おいしい米として、「ササニシキ」と「日本晴れ」が、農業試験場から発表になった。麦は明治以来の凶作。

洋風化と多様化の例として、日本酒から洋酒へ、日本茶から紅茶、コーヒー、ジュースへ、和菓子から洋菓子、チョコレートへの移行があげられる。学校給食に、パン以外にもマカロニ、スパゲッティ、麺類が採用される。アメリカの余剰産物である脱脂粉乳のミルクも付いている。コーンフレークがブームになる。アメリカ式の朝食方式であること、コーンフレークにアメリカ風のおまけが付くことで、人気が出た。ホーム・パーティという言葉とともに、タッパーウェアも人気をばくした。食事までアメリカナイズされてきている。漁獲量は世界一。国際捕鯨委員会で

制限されているが、鯨も大量に食べている。養殖もますます盛ん。冷凍魚の入荷も拡大している。

栄養面からも豊かになっている。1959（昭和34）年から本年にかけて、動物蛋白質は17.9%、脂肪は22.7%、カルシウムは6.2%、ビタミンAは18.5%、ビタミンCは1.3%、それぞれ増加している。このままの趨勢でいけば、1970（昭和45）年には、ほぼ世界的な基準量に達するであろうと予測されている（昭和38年度国民生活白書、21頁）。日本人の栄養バランスは、蛋白質12～13%、脂肪20～30%、炭水化物57～68%といわれている。実際、昭和40年代中頃にこの水準に達した（食料・農村研究会編、グラフでみる食料・農業・農村、12頁）。1971（昭和46）年をピークに、摂取熱量が減少する。ヘルシー志向の高まりによる。

地価が高騰し、住宅不足は厳しくなる。10年前と比べると全国平均6.6倍の上昇、6大都市では10倍の高騰である。相変わらず満足度最悪の住宅にかんして、新住宅建設7ヵ年計画が発表された。7年後の1世帯1住宅を目指すことになる。本年度76万2,000戸の住宅が建設された。そのうち東京都だけで17%を占めている。大都市新住宅市街地開発法が公布され、過密化する都市周辺地の開発が進むことになる。茨城の土浦、阿見、古河、総和までも市外開発区域に指定される。地価の高騰による、家賃の上昇を抑えるためにも、地価の安い郊外の遠隔地に建てざるをえない。東京駅を中心に15km圏内にある民間賃貸住宅は、著しく質が落ちる。ほぼ1室、それも4.5畳が、全住宅数の53%で最大。上下水道とガスは完備しているが、便所は共用、浴室のないものが95%である。内閣総理大臣官房広報室の「住宅に関する世論調査」での苦情割合は、「狭い」40%、「間取り、日当たり」27%、「台所、便所」21%、「建物がいたんでいる」17%、「家賃が高い」11%である。大都市への急激な人口集中が続いていることが、住宅不足の原因である。世帯数の増加以上に住宅戸数が増加しているが、経済成長にともなう人口の都市集中化の激化が、大都市における住宅事情の改善を阻んでいるのである。1958（昭和33）年から本年まで、世帯数は1,807万戸から2,097万戸へと274万戸も増加したが、住宅戸数も1,743万戸から2,037万戸へと294万戸増大している（昭和39年度国民生活白書、29頁）。

比較的質の良い政府施策住宅は、全体の35%以上を占めている。憧れの公団賃貸住宅の入居競争率は、全国平均38.9倍、東京支所管内で58.1倍。1960（昭和35）年から伸び率が高い。2月には住宅公団2,755戸に8万人が応募し、記録更新。夢の団地は抽選に当たらず、極狭の賃貸アパートに住む人が、大都市圏ではほとんどである。住宅に豊かさはない。せめて水回りを少しきれいにするか、思い切って、美空ひばりの新居におかれているロッキングチェアでも買うしかない。

レジャー・ブームに乗り、レジャー・ウエアも人気になる。セパレートの水着が流行する。オリンピックに便乗し、洋服のTPOが提唱された。冷暖房の完備、繊維の多様化が進み、キャン

ペーンは成功する。女性の化粧率は、増大しているが、男性用の化粧品の売り上げも増大している。プレタポルテ・ショーが開かれ、高級既製服の時代になる。根強い和服ブームは、女子大生の卒業式スタイルに取り入れられる。子供服にまでファッションを持ち込む。しかし衣料費の消費の伸びは鈍化し、6%程度である。3~4年といわれている被服消費の循環的な谷に本年が当たり、衣料ストックが一定に達したからである(昭和38年度国民生活白書、23頁)。

本年もレジャー関連支出は増大している。レジャー関係の支出は、所得弾力性が高い。消費支出全体で12.5%増にたいして、レジャー関係支出は16.3%も増大した。支出の内容も、映画、演劇、スポーツ鑑賞という受動的レジャーが減少し、ゴルフ(延べ人口は874万人とかなり普及したが、まだ高価で庶民が楽しめるスポーツではない)、ボウリング(ブームになり、各地でボウリング場が建設されている。ブームのピークは1973(昭和48)年頃で、全国に3,779のボウリング場、12万3,743のレーンが作られた)、旅行、登山など能動的レジャーが増えている。特に比較的手軽に楽しめるレジャーである旅行、登山、ハイキング、スキー、キャンプなどが増えている。連休初めの4月28日の土合駅には、2,500人の谷川登山客とスキーヤーが押し寄せた。7月14日の日曜日、快晴・無風の湘南の海岸に記録的人出。北アルプスにも人出が増えた。熱海は客が8%も増えた。1泊2食付き・全国平均1,400円の民宿はブームになり、サービスが追いつかない。その増えた原因は2点あげられる。①国民所得の急激な上昇、特に若い人たちに所得が急速に増加したこと、②都市集中により悪化する生活のストレスを、都会の悪条件からの逃避で解消しようとすることである(昭和39年度国民生活白書、243頁)。余暇時間もわずかながら増え、レジャー支出も増え、内容も能動的レジャーが増え、レジャーによる豊かさは拡大している。だが、手軽に、しかも短い時間にみっちり楽しもうという人びとが、同じ日に、同じ場所に押し寄せ、カミカゼ・レジャーという状態である。観光基本法が制定され、観光施設の拡充もされていくが、レジャーの豊かさを実現するためには、自由に休暇を取れる制度の確立が必要である。今でも連休とお盆、暮れ・正月の休みには、レジャー関連施設は大混乱である。

スポーツの人気は、ダントツに野球である。日本シリーズで読売ジャイアンツが優勝し、さらに大相撲で大鵬が史上初の6場所連続優勝を成し遂げたことから、「巨人、大鵬、卵焼き」という流行語ができる。ミスター・プロ野球の長島とフラミンゴ打法の王、神様の稲尾、神童の中西など多くの野球選手が、野球を盛りあげている。カミソリ・パンチの海老原博幸が、ボクシング・チャンピオンになり、新しい英雄になる。将棋界の英雄は、5大タイトルを独占した大山康晴である。英雄の力道山が、やくざにさされて死亡した。

オリンピックを迎えるために、英会話のブームがおきる。手帳やモデル・ガンがブームになる。豊かさの種は尽きない。

歌謡曲のレコード大賞は、『こんにちは赤ちゃん』である。この歌で歌われる母は、ひたすら

手元で子どもを見つめ、過剰に子どもに期待する教育ママである。この団塊世代の母が、ニュー・ファミリーを形成するのである。ベスト・ワンは『高校三年生』である。ここにも親の期待と希望がつまっている。親たちが果たせなかった高卒、あるいは大卒からの出世を、子どもに託したのである。親に期待される子どもは、希望と不安を歌う。皆と肩を組み合った友と離れ離れになり、実社会や大学に出て行くのである。『美しい十代』は、十代を美しいと賛美するが、夕日の沈む頃には惜別しなければならぬ十代でもある。青春歌謡は、希望・期待・喜びと不安・惜別・悲しみという、相矛盾する感情が歌われている。その矛盾にこそ、青春の本質と豊かさがある。

アニメによる連続テレビ漫画国産第1号の『鉄腕アトム』が、1月1日から放映された。親たちから拒絶あるいは軽視されていた漫画が、茶の間で、家族とともに見られるようになったのである。最高40%の視聴率を獲得する。『鉄人28号』などが後に続くことになる。NHKの大河歴史ドラマの第1号『花の生涯』も、豪華キャストで放映された。史上テレビ・ベスト7位である。為替自由化の影響で、外国テレビ映画の放送権料が高くなり、国産テレビ・ドラマの名作が多く作られ、豊かな年であった。『凶々しい奴』、『七人の侍』など名作が放映された。初の日米テレビ中継で、突然ケネディ大統領暗殺の速報が映し出されたときの驚きは、すさまじいものがあった。

テレビの漫画放送が開始されたことの、文化的・社会的影響と豊かさ意識の変容についてまとめておこう。①テレビを置いてある茶の間に漫画が入ってくることは、もう漫画を否定・拒否できない家庭にした。漫画は俗悪だと否定できなくなった。②『鉄腕アトム』は明治製菓、『鉄人28号』は江崎グリコ、『狼少年ケン』は森永製菓が、それぞれ放映した。菓子業界における、大量生産、大量消費、そのための大衆広告という体制が確立したのである。テレビ番組のスポンサーになれる資金力がある大菓子製造会社しか、この業界では生き残れなくなった。③菓子の売り上げを左右するのが、菓子のおまけに付く、テレビで放映されている漫画のおまけである。バッジ、ワッペン、シールなどに漫画のキャラクターが描かれており、子どもたちは菓子とともに漫画も楽しめた。菓子以上に漫画のおまけ集めに熱中する子どもも多かった。④数年前のおまけは、本とか野球道具という実用的な物であったが、この頃のおまけは小さく薄いシールや、どこにでも貼れるワッペンであった。子どもたちは、威圧感のない、流動感・浮遊感を意識したからこそ、おまけ集めに没頭したのである。⑤茶の間でタダで漫画を見られることが、貸本屋を激減させ、お店で売る菓子に漫画のおまけが付くことが、駄菓子屋を排除させた。このことが子どもを浮遊させる傾向を強めた。いままでは駄菓子屋や貸本屋と路地裏の空間が、子どもの交流サロンとして働いた。店のおじさんお婆さんとの対話が子どもを育てた。あるいはガキ大将から教えられたり、年少者を叱ったりする、子ども文化と自立形成の場所がその空間であった。その空間がテレビ漫画の放映で消滅しようとしている。子どもは茶の間で1人で、あるいは家族で、会話もなく

テレビの漫画を見ながらお菓子を食べるようになった。子どもは自立できず、浮遊するだけである。その浮遊感が、薄っぺらなシールやワッペンというおまけを求めさせる。豊かさも薄っぺらになったのである。

日本映画では、評価も興行成績でもベスト・ワンは『にっぽん昆虫記』である。激動の戦後を、エネルギーに生きる主人公から、エネルギーを得たのである。外国映画は、『アラビアのロレンス』の映像の美しさ、スケールの大きさに魅入られた。第2位の『奇跡の人』は、ヘレン・ケラーの奇跡に感動した。名作も多く生まれ、豊かさを与えてくれた映画も、テレビにおされ、観客数も減少し、映画館もつぶれている。安く作れるピンク映画が台頭してくる。

本では、高度成長が続くなか、経営関係の本が売れた。『徳川家康』が「経営者のバイブル」として前年度から売れ続けている。『危ない会社』は、「10社のうち9社までがつぶれかかっている」というセンセーショナルな文句で、泰平ムードに慣れたビジネスマンの危機感をあおった。光文社マジックが、ビジネス書でも発揮された。経営の神様の『物の見方考え方』、近未来のビジネスのあり方を説いた『流通革命』も売れた。経済をより発展させ、豊かな安定的生活を築くために、本を読んだ。感動し、心を豊かにするためにも『野生のエルザ』、『太平洋ひとりぼっち』などの本を読んだ。他方で悪書追放運動が全国的広がりを見せている。

漫画界では第2次漫画ブームがおきている。『少女フレンド』と『マーガレット』が創刊され、少女雑誌の週刊化がすすんだ。この頃に少女漫画の母物というパターンが完成した。西洋の少女のようなスタイルをもつ主人公は、金持ちの家に生まれるが親の愛に恵まれていない。波瀾万丈のストーリーの終わりに、シンデレラのような結婚をし、母の愛も獲得し、幸せに2人で暮らすのである。当時の少女が抱いていた幸せ感・豊かさ意識のあらわれである。1960年代になると「ラブコメ」が中心となり、1970年代から文学、心理学、SFなど様々なモチーフが持ち込まれ、質的変革を遂げ、現在に至っている。

11. 1964（昭和39）年

(1) 政治・経済

上期の日本経済は、輸出の好調が軸となり、金融引き締めにもかかわらず国民総生産が拡大を続けた。その一方で、国際収支の改善も実現した。10月の東京オリンピック開催を控えて、東海道新幹線の営業開始など、上期は建設活動も活発であった。しかし下期になると、国際収支の不均衡是正のための金融引き締め効果が浸透し、国内需要が沈静化し、企業倒産の増加、企業収益の低下、株価の不振、消費者物価の上昇など、各種のひずみが目立ってきた。そこで12月の預金準備率の引き下げ、翌年の1月と4月の公定歩合の引き下げなどの金融緩和策が次々と実施

された。だが景気回復の足取りは重く、翌年10月の谷を迎えるまで明るさは見られなかった。消費構造が変化し、耐久消費財ブームが一巡し、消費需要の伸びが鈍かったこと、投資ブームの行き過ぎが企業体質を弱め、利潤を低下させていたことも、不況を深刻化させた原因である（土志田征一編、経済白書で読む戦後日本経済の歩み、96頁）。

主な経済指数は次のとおりである。経済成長率実質12.5%、名目17.5%。国内総生産29兆5,413億円、前年比実質11.2%増、名目17.6%増。1人当たり国内総生産30万5,000円。国民所得23兆3,770億円、前年比15.8%増。国家予算3兆3,405億円。年末現在日銀券発行残高2兆2,988億円。一般会計歳出決算3兆3,109億円。財政投融资1兆4,305億円。年末外貨準備高19億9,900万ドル。粗鋼生産高3,979万tで、世界第3位。四輪車生産台数170万台（自動車の生産では世界で第4位、トラック第2位）。四輪車輸出台数15万台。主要機械製品の輸出金額ランキングでは第3位の932億円。四輪車新規登録台数152万台（軽自動車の保有台数は、100万台を突破）。二輪車生産台数218万台。二輪車輸出台数60万台（対米輸出は5年間で10.5倍）。本年度産米1,258万2,000t。米価975円。初任給1万7,100円。勤労世帯1ヵ月間の実収入6万3,396円。総広告費3,491億円・前年比117.1%増。

1月1日、住友銀行は、月1回週休2日制を実施する。1月11日、第一・朝日両銀行は、合併の仮調印をする。金融界の統合第1号。1月17日、経済関係閣僚懇談会は、当面の物価安定具体策を決定した。公共料金値上げの1年間ストップなどである。1月10日、日銀は、新窓口規制で、都銀に貸し出し抑制を要請した。1月20日、証券不況深刻化のため、日本共同証券㈱が設立された。市銀14行と4大証券により共同出資された過剰株式購入機関である。1月27日、第3回日米貿易経済合同委員会が開催された。

2月1日、国民金融公庫は、普通貸付の貸付限度額を一律200万円に引き上げた。

3月18日、日銀は、公定歩合を2厘上げ、1銭8厘とした。3月、トヨタ自動車は、わが国で初めて乗用車月産1万台を突破した。4月、日産自動車も「ブルーバード」月産1万台を達成。3月、早川電気（現在のシャープ）は、トランジスターを用いた世界初の電子卓上計算機を開発した。53万円。以後、急速な技術革新と値引き競争で低価格化が進む。

4月1日、日本は、IMF8条国に移行した。国際収支が悪化しても為替操作を自由にできない国になった。一般的な財政金融政策だけしか、国際収支改善をできなくなったのである。だが円が、主要国家の通貨と交換可能な国際通貨として認められた。4月8日、中国経済友好代表団が来日した。4月10日には、晴海で中国経済貿易展覧会が、4月30日まで開催された。4月17日、春闘統一行動で、鉄鋼、造船、電機など民間労組を主体に24時間ストがおこなわれた。4月19日、松村謙三は、中国で中日友好協会会長・廖承志と、新聞記者交換、LT貿易連絡事務所設置にかんして合意した。4月19日、第9回働く婦人の中央集会が開かれる。4月27日、東京の晴

海で、初のオート・アクセサリー・ショーが開かれる。4月23日、日本道路公団は、東名高速道路の建設用に、世界銀行と5,000万ドルの借款契約に調印した。4月28日、日本は、OECDに加盟した。貿易外取引と資本移動にかんする自由化義務を負った。開放経済体制への移行により、西欧諸国との国際分業を促進し、西欧諸国の対日差別を撤廃させ、経済成長を持続させることを目的としていた。先進国、経済大国の仲間入りをしたことになる。4月30日、4月の企業倒産（負債1,000万円以上）332件、負債総額363億9,500万円。戦後最高記録更新。4月、出稼ぎに行ったまま帰らない農民が、秋田県だけで388人。県は行方不明の父親をさがす運動をおこす。出稼ぎ者はこの年全国で100万人を超え、家族崩壊の危機をあらわす「半年後家」の言葉も生まれた。特に東北地方の農村から、都市の各種の建設工事や自動車その他の製造業に就業する、冬期間の季節的出稼ぎ労働者が急増したのは、この頃である。1970年代にはいると、工場の地方分散が進み、出稼ぎ問題は少なくなる。

5月6日、鐘紡は、男子55歳の定年制廃止を宣言。5月18日、東京の新宿民衆駅（ステーション・ビル）が完成する。商店や食堂が250軒はいり、全国36の民衆駅ビルのトップになる。地下には自動式コインロッカーも初めて登場する。5月15日、衆議院は、部分的核実験停止条約を多数で承認。5月25日、参議院も承認し、成立した。5月26日、新三菱重工（現在の三菱自動車）は、6人乗り、6気筒・2,000ccの「デボネア」を発売する。125万円。

6月1日、戦後財閥解体で分離していた新三菱工業、三菱日本工業、三菱造船が合併し、三菱重工業が発足。国際競争力強化のための、独禁法の空洞化が始まる。6月2日、大蔵省は、ドイツ銀行と西独貨公債2億マルクの発行契約に調印したと発表した。史上初のマルク国債である。6月15日、通産省は、新ココムリストを発表した。輸出禁止品目を162から155に減少した。6月16日、東京・山谷で、労務者約1,000人が騒ぎ、機動隊が出動し、11人を逮捕する。6月20日、暴力行為処罰法改正案が成立した。6月24日公布。各地で、60年安保以来の規模の反対デモがおこなわれ、警官隊と衝突する。6月30日、三越百貨店は、中元ギフトセンターを開設した。以後、中元と歳暮ごとに開設する。6月、コダックは、「インスタマチックカメラ」を発売した。

7月2日、肥料価格安定等臨時措置法公布。5年間の時限立法である。工業の労働者増加のための農業の近代化に、安い肥料の安定供給が必要なのである。7月3日、工業整備特別地域整備促進法が公布された。鹿島など6地域が指定された。以後指定が続く。7月9日、林業基本法が公布された。林業構造改善、林産物市場の合理化を進め、生産性を向上させることを目的とする。7月15日、本田技研は、国産初のレーシングカー「フォーミュラ1」(RA 271)を発売する。日本自動車産業で世界的に遅れている分野が、レーシングカーの分野である。レーシングカーは、最高の自動車技術を結集した車である。レースで優勝することは、自動車技術の最高峰の証明で

ある。翌年の10月、1.5リッターF1最後のレース第10戦メキシコ・グランプリで、RA 272が初優勝する。F1活動は、本田技研の自動車の技術向上に大きな貢献をした。7月18日、山陰・北陸地方の集中豪雨で、死者・行方不明128人。7月26日のアメリカ経済誌で、アメリカを除く世界200社番付に、日本企業37社が入る。前年比6社増である。7月27日、中卒以上の農家子弟の動向調査によると、農業就業5.3%、進学53.2%である。農家の跡を継ぐ者が少なくなる。

8月10日、社会党、共産党、総評など137団体が、ベトナム戦争反対集会を開く。8月2日のトンキン湾事件を契機として、4日からアメリカ空軍が北爆を開始したからである。後にトンキン湾事件は、アメリカ軍の捏造であったことが判明する。8月22日、労働省は、翌年3月の中学卒業者への求人率が約5倍と発表した。8月11日、閣議は、南ベトナムへ、医薬品など50万ドル相当の緊急援助を、アメリカの要請で決定。また10月27日に第2次援助100万ドルを決定。8月23日、池田首相は、10年後には農業人口を現在の3分の1にしたいと、記者会見で発言。8月26日、東京都紀尾井町にホテルニューオオタニが完成した。ユニットバスなど最新の建設工法と、屋上回転レストランの回転部分には戦艦大和の巨大砲台を回転させた技術が応用された。最高級のホテルとして多くの外国人も宿泊した。その他にもオリンピックのために来日するといわれている外国観光客13万人を当て込んで、1960(昭和35)年から4年間で55ものホテルが建てられた。土建業は空前の好景気にわいた。さらに13万人の観光客が、252億円のお金を落とすという試算のもとに、百貨店や商店街も準備を整えていた。伊勢神宮の巫女まで英会話の練習に余念がなかった。実際の外国観光客は3万人。派手にお金を落とすこともなかった。ホテル業界は、建設資金の借金返済に苦しむ。百貨店や商店街は、テレビ中継に熱中する人が多く、大会中は閑散としていた。家電業界も、テレビの普及率は白黒テレビで8割に達し、カラー・テレビは高すぎたので、売り上げが伸びず、乱売に走っても、在庫と過剰設備に悩むことになる。

9月1日、閣議は、中・高齢者の雇用促進を決定した。人手不足による恩恵に浴していないのが中・高齢者であった。中・高齢者の失業率は改善しなかった。9月4日、日銀政策委員会は、日本証券金融(株)を通ずる債権担保の特別融資を決定した。株価安定のためである。9月17日、大蔵省は、日本共同証券の資金拡大などを決定した。日銀も同意。証券不況が深刻化している。9月22日、田中蔵相は、証券市場対策に財界の協力を要請した。9月5日、炉内容積世界一の東海製鉄所第1号高炉が完成した。9月7日、IMF、世界銀行、国際開発協会、国際金融公社の第19回合同年次総会が、東京で、9月11日まで開催された。102カ国が参加した。経済面での、日本の国際社会へのお披露目である。

10月14日、ソ連のフルシチョフ首相が突然の解任。10月16日、中国は、原爆実験に成功したと発表し、核兵器全面禁止のための世界首脳会議を提唱。オリンピック開催中の大ニュースであった。10月15日、郵便貯金高が、2兆円を突破。10月、十条キンバリーは「クリネックスティ

シュー」1箱100組200枚・100円、山陽スコットは「スコッティ」80円を、お化粧落としの紙として発売する。「使い捨てできるハンカチ」というセールス文句にもかかわらず、当初小売店は、値段の高い西洋ちり紙が売れるはずがないと、けんもほろろだった。しかし次第に浸透し、生活必需品となった。10月17日、共産党を除く各党と政府は、中国核実験に抗議した。

11月9日、第47臨時国会が召集され、池田内閣が総辞職した（池田首相入院のためである）。衆参両院で佐藤栄作を首相に指名し、前閣僚を再任して、佐藤内閣が成立した。高度成長のひずみ是正をスローガンにした。11月12日、原爆を搭載している疑惑の強い、アメリカ原子力潜水艦シードラゴン号が佐世保に入港した。初原潜入港である。8月26日に原子力委員会が、アメリカ原子力潜水艦の寄港が安全に支障ないと統一見解を発表したからである。佐世保でアメリカ原子力潜水艦シードラゴン入港反対デモがおこなわれ、警官隊と衝突する。全学連の学生15人が逮捕。デモには、全国から6,000人が参加した。住民は、アメリカ軍も大切なお客様という意識が強く、デモを遠巻きに見つめるだけであった。11月17日、公明党結成大会が開かれ、委員長に原島宏治が選ばれる。参議院に15議席ある公明政治連盟は発展的解消をする。1967（昭和42）年の総選挙で初めて25名が当選する。11月17日、経済審議会は、「中期経済計画」の答申案を決定し、内閣も政府計画として決定。本年度から1968（昭和43）年度にかけて、これまでの所得倍増計画のひずみを是正し、社会開発政策をおこない、高度安定成長を目指す。住宅の整備、生活環境施設の充実、公害対策、低生産性部門の近代化にともなう摩擦対策をおこなう計画である。しかし佐藤内閣は、党内部の混乱問題、中央と地方の権限問題、日韓問題、物価問題などの解消に精力をとられ、社会開発は進まなかった（蛭山正道、日本の歴史26 よみがえる日本、346～347頁）。

12月1日、日本特殊鋼は、会社更生法適用を申請した。12月7日、海運造船合理化審議会は、「海運国際収支改善策・内航船腹量の策定」を答申した。12月12日、サンウェブ工業は、会社更生法適用を申請した。12月26日、経済企画庁は、本年を、「倒産が増えているが、生産も増えている」と回顧した。負債1,000万円以上の倒産4,212件（前年の2.4倍）、負債総額4,631億1,500万円で、戦後最高。成長下の不況といわれた。12月29日、アメリカ財務省は、アメリカでの日本の鉄鋼製品にかんするダンピングは白であるとして、調査を打ち切った。

本年の主な出来事。東芝、松下、NEC、ソニーなどが、家庭用VTRを一斉発売した。「番組冷蔵庫」として、1978（昭和53）年頃から急激に普及しだす。総広告費3,491億円のうちテレビ広告費は1,081億円。初めて年間1,000億円を越す。電気冷蔵庫の国内出荷台数が300万台を越え、第1次黄金時代を迎える。普及率47%。象印マホービン、魔法ビンの量産を開始した。所得税法改正。生命保険料所得控除額を、2万円未満は全額、2～5万円まではその半額に引き上げられた。ダイエーと松下電器が紛争をおこす。ダイエーでの松下製品の安売りに、松下が製品

納入を禁止する。メーカー側と流通側のパワー戦争である。1996（平成8）年和解。大塚製菓、ホテルニューオオタニなど設立。

本年に発売された主な電化製品。電気カーペット、レンジフード換気扇、オーブントースター、ヘア・ドライヤーなど。

(2) 社 会

1月25日、文部省は、特殊教育振興方策を発表した。養護学校の設置を各県に要請した。昨年5月に文部省が調査したところによると、特殊児童数107万人で、小・中校全生徒の6%を占める。精神衰弱児の就学率は7%にすぎない。1月27日、厚生省は、アメリカ公衆衛生局が「紙巻きたばこ肺がん説」を発表したことにより、がん専門家による肺がんについての対策会議を開く。喫煙家にも、フィルター付きたばこやパイプたばこへの転向が目立つ。1月29日、第4次道路整備5ヵ年計画が決定。5年間で総事業費4兆1,000億円。

2月8日、国産小児マヒ・ワクチンが完成し、2月20日全国で投与が開始される。2月10日、通産省は、産業公害の防止対策を発表した。ばい煙や工業排水を規制強化。2月23日、国鉄は、電子式座席予約装置（MARS）の運転を開始した。最初はミスが続出したが、しだいに予約窓口の混雑を解消していく。翌年の9月24日からみどりの窓口が始まる。2月29日、日本鉄道建設公団法が公布。3月23日、同公団が発足した。新幹線を建設していくことになる。2月、卒業を控え、中学校内での対教師暴行事件が頻発する。

3月4日、大相撲高砂部屋に入門した、ハワイ出身のジェシー（後の高見山）は、新弟子検査に合格した。3月9日に初土俵を踏む。伝統的国技に、アメリカ人が加わったことは、日本の国際化を象徴する出来事であった。3月14日、文部省は、小・中学校教師用の「道徳の指導資料第1集」70万部を発行。小学3年生で日の丸、中学1年生で小泉信三の「国を思う心」を教えるなど、具体的に愛国心を指導しようとした。3月15日、全国進行性筋萎縮症児親の会が発足。翌年、日本筋ジストロフィー協会と改称する。3月28日、東京大学の大河内一男学長が卒業式で、「太った豚になるより、やせたソクラテスになれ」と告辞する。各紙の紹介で有名になるが、式場では読み落とされていた。3月24日、ライシャワー大使が、アメリカ大使館前で、19歳の少年に右脚をさされて負傷。その後、輸血から血清肝炎になる。売血の「黄色い血」が問題になる。当時は輸血用血液の97%が、売血。3月、千葉大学で、初の肝臓移植手術がおこわれた。3月25日、政府は、四日市地区大気汚染特別調査団の報告書を国会に提出。四日市をばい煙規制法の指定地域にする。汚染地域の40歳以上の住民の慢性気管支炎症状を有する割合は、非汚染地域の40歳以上の住民の2~3倍であった（昭和41年度国民生活白書、45頁）。四日市の石油コンビナートは、東洋一の規模を誇り、全国総合開発計画の新産業都市のモデルであった。四日市で

は、1960（昭和35）年頃から、周辺住民が呼吸器官の疾病を訴えてきた。調査の結果、石油コンビナートから、年間約10tも放出される硫黄酸化物を主体とする大気汚染物質が原因と断定された。政府は、石炭と違い石油のコンビナートは公害を発生しないと主張していた。法律も守ってくれなかった。1962（昭和37）年のばい煙排出規制法は、ざる法であった。全国の住民は、「四日市の二の舞をするな」とのスローガンのもと、公害反対運動を盛り上げていった。1967（昭和42）年に四日市ぜんそく患者が訴訟をおこし、1972（昭和47）年、原告全面勝訴となる。1973（昭和48）年、その判決に驚いた政府が、公害健康被害補償制度を発足させ、地域開発の基準を変更した。

4月1日、一般海外渡航自由化が始まる。年1回、商用を含め500ドル（1ドル=360円であるから18万円）と日本円2万円以内である。初日の申請者だけで500人。本年の渡航者は12万7,000人。ジャルパックが誕生した翌年は15万8,827人、1970（昭和45）年は34万3,542人と順調に増大し続けた。年間の日本人渡航者が100万人を超えるのは1972（昭和47）年、持ち出し制限がなくなり気軽に渡航できるようになるのが1977（昭和52）年以降。4月15日、日本国内航空（株）が設立された。日東、富士、北日本3航空会社の合併である。4月20日、代々木ゼミナールは、1万人の入学式をおこなう。4月20日、簡易保険の最高保険額が、100万円に引き上げられる。4月20日、趣味の10円切手「源氏物語絵巻切手」が発売される。東京中央郵便局では5,000人が行列し、発売開始30分で売り切れる。発売された2,800万枚のうち半数以上が切手業者にわたり、10倍以上の値段で売られていた。切手ブームは、1960年代におこり、1970年代にはいと急速にしぼんでくる。4月23日、警察庁は、交通事故死の急増に対処するため、初の「全国一斉24時間交通取り締まり」を実施し、6万2,000余人を摘発した。4月24日、政府は、第1回戦没者叙勲を発表した。1万177人に勲七・勲八等を授与。4月29日には、第1回生存者叙勲201人を発令。吉田茂元首相に大勲位菊花大綬章、片山哲、石橋湛山元首相ら25人に勲一等など。4月27日、文部省は、家庭教育資料集第1集「子どもの成長と家庭」を発表。この月以後、全国700の市町村で家庭学級を開設する。

5月3日、プロ野球巨人の王貞治選手は、阪神戦で史上初の1試合4打席連続本塁打を記録する。後楽園周辺の薬局では、王選手がCMに登場する「リポビタンD」の売り切れ店が続出した。9月6日には、年間53本塁打の日本記録を樹立した。この年本塁打と打点の2冠。5月、主婦連から分裂して、三巻秋子副会長らが消費科学連合会を結成し、消費科学センターを設立した。商品の比較テスト、消費者啓蒙運動などをおこなった。

6月1日、大阪国際空港に、ジェット機が乗り入れる。6月11日、昭和電工川崎工場で、プロピレン・オキサイドのタンク爆発事故がおきる。死者18人、負傷者99人。6月16日、新潟を中心に、マグニチュード7.5の大地震がおきる。新潟地震である。死者26人、負傷者447人、

被災者8万6,000人、建物全半壊8,600余戸、浸水1万5,000余戸、田畑の流出・埋没4,400ha。新潟市内で地盤沈下が続出。昭和石油新潟製油所の石油タンク80基以上を焼き尽くした。昭和石油には化学消防車が2台あったが、市には1台もなかった。高度成長の速度に、化学工場の安全管理が追いつかなかったことも、被害が甚大化した原因である。6月18日にやっと電気がつく。この地震で、信濃川埋め立て地域での液状化現象が、はじめて確認された。都市とコンビナート地区での災害対策の立ち遅れを反省させた。6月5日、神奈川県は、全国初の公害認定基準を制定する。6月19日、日米間の海底電話ケーブルが開通し、電話が国内並みの即時通話になる。

7月1日、母子福祉法が公布。母子家庭の福祉強化などが盛り込まれた。7月1日、前年に生まれた「おぎゃー献金」が、全国運動に発展し、東大病院分室で「おぎゃー献金全国運動発足のつどい」が開かれた。7月2日、重度精神薄弱児扶養手当法が公布。1966(昭和41)年、特別児童扶養手当法と改称。7月11日、宇宙開発推進本部が開発した、3段式、長さ19m、重さ7tの、日本最大のランダム3型1号機が打ち上げられた。高度100kmに達した。科学技術庁の宇宙研と、先行する東京大学の宇宙航空研究所の対立が激しくなり、一元化が求められている。7月14日、東京の品川の倉庫で硝化綿爆発事故がおきる。警告を無視して野積みされていた硝化綿が爆発・炎上する。キノコ雲もあがるほどのすさまじい火事で、消防官19人が殉職した。7月16日、神奈川県教育委員会は、人口増加による教員不足のため、教員の退職勧告を翌年3月まで延期すると発表した。7月19日、警視庁交通課は、カミナリ族の一齐取り締まりをする。

8月6日、東京は、1881(明治14)年以来という異常渇水で水不足が深刻化する。17区で第4次給水制限(1日15時間断水)を実施する。病院などへは自衛隊給水部隊が災害出動する。都水道局では、貯水池流域に人工降雨での水量増加を試みる。バケツ1杯200円の水売りもあらわれる。8月25日、荒川取水あさか水路が開通し、第3次制限に復帰する。「東京砂漠」が流行語になる。大阪や福岡でも水不足となる。雨量は例年より激減していないから、高度経済成長による都市への人口集中や、オリンピック関連工事の増加が、水不足の原因のひとつである。8月19日、厚生省は、献血組織の整備、移動採血車の普及など、売血からの転換を促すための方策を発表した。1969(昭和44)年頃に各都道府県に1つ以上の日赤血液センターができてから、献血主体となる。8月23日、母親大会で「ポストの数ほど保育所を」という要求がだされた。その言葉を合言葉に、希望者全入の地域保育所設置運動が展開されていく。保育所不足は解消できていない。8月26日、前日に千葉県習志野市で死亡した男性が真性コレラと断定された。オリンピック前なので、政府は防疫対策に全力を尽くす。東京都の保健所は希望者に予防接種をした。行列ができるが、1週間でさわぎがおさまる。8月、言語障害児をもつ親の会全国協議会の第1回大会が開催された。東京、大阪、京都、山梨、千葉などの母親グループ600人が参加した。

9月1日、大阪市は、建物用の地下水くみ上げを市全域にわたり禁止する。9月3日、文部省

は、大学生急増対策として、9学部35学科の新設を発表した。9月7日、全国連合小学校長会は、学力テスト全面禁止を要望した。10月14日に、文部省が、翌年以降20%抽出調査に改めると発表。9月9日、全国の郵便局で、オリンピック記念切手5円が一斉発売。記念切手は、5+5円付加金付きが20種類、1961(昭和36)年10月から本年6月23日まで7次にわたって発行された。5円が9月9日、10円、30円、40円、50円の4種類が、10月10日に発行された。記念貨幣は、100円銀貨が9月21日(11月24日追加発行)、1,000円銀貨が10月2日(10月29日追加発行)に発行された。9月12日、文部省は、体育施設5ヵ年計画を発表した。小・中・高校のプールのうち、70%を国庫補助の対象とする。9月13日、静岡県沼津市で、石油コンビナート進出反対の住民集会が開かれる。通産省と静岡県側の「公害発生の怖れなし」という調査結果が誤りであることを、住民グループの調査が明らかにした。公害問題に危機感を抱いた住民2万5,000人が参加。9月30日には市議会も誘致反対を決議した。結局この地域での建設が断念された。調査と学習をふまえた住民の反対運動の、最初の成功例である。9月16日、富士山頂に気象レーダーが完成する。世界で最高位の観測所である。9月17日、東京モノレールが、羽田空港一浜松町間で開業。全長13.2km、所要時間15分、250円。9月29日、文部省は、学校教育における「集団行動指導の手引き」草案を発表した。これが、教練や秩序運動の復活として問題になる。9月、東京の環状7号線が完成する。

10月1日、秋田県八郎潟の干拓地に大潟村が誕生した。八郎潟干拓は、1957(昭和32)年から始まり、1977(昭和52)年に完成する。172.3km²の日本最大の開拓地である。中央干拓地には、589戸の農家が入植し、1戸当たり15haの大型機械化稲作営農で話題となった。しかしその後の減反政策で、一部畑作への転作が求められ、転作反対派が自由米販売をおこなうなど、問題をおこしている。10月1日、東海道新幹線が開業。東京一大阪間を最高速度210kmで、「ひかり」4時間(当時特急で6時間半)、「こだま」5時間で結ぶ。5年半の工事期間と、3,800億円の工費をついやした新幹線は、世界に日本の技術の高さを示した。列車集中制御装置(CTC)での一括管理、線路上の異物排除、振動対策、気密性の保持、列車自動制御(ATC)など技術の粋を集めた新幹線だが、当初はトラブル(車内のトイレの扉が故障して、3時間閉じこめられる事故、線路作業員の死亡事故など)が続出し、営業が軌道に乗るのは1ヶ月後であった。乗車率「ひかり」9割、「こだま」7割の好調さと、東海道線関連の輸送力38%増で、国鉄のドル箱となる。大量・高速輸送時代の幕開けである。だが騒音問題、在来線の本数削減・赤字化など新たな問題もおこした。需要のないところに、政治的圧力で新幹線をひき、採算を悪化させるという問題も生みだした。東京一関西間が日帰り観光、日帰り出張できるようになった。修学旅行も遠距離化された。便利になったぶん、旅行がかえって忙しく、味けのないものになったとの声もでた。新幹線は、戦前に構想されていた弾丸列車の実現である。国鉄マンの夢の実現は、国鉄の

凋落のはじまりとなった。1969（昭和44）年東名高速道路と名神高速道路が結ばれ、高速道路の交通量が飛躍的に増大し、輸送の主力が鉄道から自動車に移る。庶民の足としての鉄道の地位も、マイカーの普及で低下していった。貨物輸送で、自動車と鉄道のシェアが逆転するのは、貨物輸送にかんしては1966（昭和41）年、旅客輸送にかんしては1971（昭和46）年である。鉄道は、コスト割れの運賃で需要を喚起しようとしたが、流れを変えることはできなかった。10月5日、国鉄バス名神高速線名古屋―神戸間が開通。初のハイウェイバスである。10月10日、第18回オリンピック東京大会が開かれる。1940（昭和15）年に予定されていた東京オリンピックを実現したのである。参加95ヶ国、選手総数5,541人。北朝鮮とインドネシアが選手団を引きあげる。日本選手は410人。獲得メダル数の予想では13個であったが、金メダル16、銀メダル5、銅メダル8であった。アメリカとソ連に次いで第3位。5年間・選手強化費用20億円を費やし、新たに開発された科学的トレーニングの成果である。10月23日、女子バレー決勝戦のテレビ視聴率は、NHKだけで85%。日本人はその勝利に涙を流して感動し、よろこびに酔った。テレビで見た人は全国民の97.3%。連日80%を超える視聴率であった。だがオリンピック開催のために、戦後の廃墟から復興を遂げた東京の町が徹底的に改造された。外国から来る、大切なお客さんのために恥ずかしくない施設や市街地を、一からつくり出したのである。国際水準に向かって、最初からがむしゃらに日本をつくり上げていこうとした。開催までの7年間に1兆円を超える投資。空前の規模に、諸外国は30億ドルのオリンピックと驚嘆した。投資の8割は、新幹線、高速道路、地下鉄などの交通網の整備にあてられた。

11月8日、パラリンピック東京大会が開催される。9つのメダルを獲得し、第13位。障害者スポーツを広く認知させ、普及させた。

12月、東京で、有名幼稚園の入園願書受付に2日間も徹夜する人がでて、ついに警察官も出動した。12月14日、全日空機は、スモッグのため羽田空港に着陸できなかった。

本年の主な出来事。東京都内に、無線タクシーが登場。タクシー会社30社が合同で、走行中のタクシーと交信できるセンターを開設したのである。交通基本問題調査会は、首相への答申のなかで、一貫した交通教育の義務化を勧告した。しかし文部省は、「そんなことをしていて、算数・国語・外国語で遅れをとったらどうします」と、無視。文部省は、要保護・準保護児童を164万人、厚生省は、欠損家庭を126万世帯と発表。自然を守ろうというナショナル・トラスト運動がスタートした。翌年、鎌倉の鶴岡八幡宮の裏山の宅地造成計画に反対する市民たちが募金運動を始め、1,500万円を集めて、1.5haを買い取り、開発を中止させたのが第1号である。その後、知床半島の原生林、和歌山県田辺市の天神崎などを守った。神奈川県江ノ島ヨットハーバーがオープン。収容能力1,040隻で、日本一。オリンピックのヨット競技がおこなわれた場所である。ゼブラの3色ボールペン「スリーカラー」（1本130円）が売り出され、カラーボール

ペンが流行し始める。アメリカ生まれの着せ替え人形「バービー」, 「タミー」のブームがおきる。着せ替え衣装約 100 枚全部揃えると 5 万円。「リカ」ちゃん人形という超ロングヒット商品が誕生するのは, 1967 (昭和 42) 年 7 月。「バービー」などは, ハイティーンを設定して, サイズも大きく, グラマラスで, 顔も大人っぽい。「リカ」は, 11 歳を想定し, 小振り, やせっぽち, 心細げで, 何よりかわいらしい。「リカちゃんドリームハウス」, ファミリー, 車, ドレス, ボーイフレンドなど次々と発売になり, 社会現象をうまく取り入れながら, 少女の豊かさ意識を実現していった。

(3) 食 料

1 月 29 日, 政府は, 学校給食用牛乳の国庫補助を 1 人 1 食分 1 合 (187.5 g) 当たり 4 円 50 銭引き上げることを決定した。本年, 牛乳 180 cc 18 円。1 月, 毛ガニ漁が全面禁止になる。1 月, 徳用米が, 準内地米を含め 1 人 1 ヶ月 10 kg の配給となる。1 月, カルビー製菓 (現在のカルビー) は, 「かっぱえびせん」 (130 g・50 円) を発売する。お菓子のイメージを一変させた。あられのようでありながら, お好み焼きや天ぶらの香りと味がする。いったん食べたすと, なかなかやめられないで, クセになる。超ロングセラー商品になる。それは, 子どものお菓子の好みが変わっているからである。お菓子の主力商品は, 1950 年代がキャラメル, 1960 年代がチョコレートであったが, 1960 年代末頃から甘いものでなく, スナックやせんべい・あられが好まれるようになってくるのである。子どもの好きな菓子の調査で, 本年チョコレート 70.7% で 1 位, せんべい 48.3% で 3 位, 1969 (昭和 44) 年チョコレート 41.2% で 4 位, スナック 48.5% で 2 位 (果物が 52.1% で 1 位, せんべいは 43.3% で 3 位)。都市化がすすみ, 走りまわられる路地裏がなくなった子どもたちには, 甘いものが必要でなくなったのである。家でテレビや漫画を見ているときに食べる, 軽いスナックが必要になった。その変化の始まりの時にヒットした商品が「かっぱえびせん」であった (齊藤次郎, おやつとマンガとおまけの合体, 子どもの昭和史 おまけとふろく大図鑑, 別冊太陽, 69 頁)。2 月, 東京の四谷の主婦会館で, 魚の「ウソつき表示」を摘発する会が開かれる。2 月, ふりかけブーム。昨年の売り上げは 1961 (昭和 36) 年の 10% 増, 本年はその 100% 増。1960 (昭和 35) 年発売の「のりたま」以来, 手軽に栄養がとれると人気がある。2 月, 焼酎がホワイトリカーと呼ばれ始める。3 月, 東京都は, 飲食店に「オリンピック A マーク」制度を実施した。監視員の採点が 90 点以上になるとこのマークを貼ってもらえる。4 月 1 日, ココア, ケーキ, インスタント・ティーが自由化。5 月 27 日, アイスクリームの成分規格が, 乳成分 3 % から乳脂肪 3 % 以上に改正。細菌数の規格も変わる。5 月, 理研ビタミンは, 年間を通して食べられる「塩蔵わかめ」を発売した。包装わかめのはじまりである。6 月 1 日, ビール, 酒類が 25 年ぶりに全面的自由価格となる。今夏も屋上ビアガーデンが流行し, 女性を含めてビールが

飲まれる。ハワイアンを聴きながらビヤガーデンで1杯が、サラリーマンの夏のささやかな楽しみであった。

7月9日、閣議は、生産者米価150kg1万5,000円と決定した。7月5日の米価審議会では、生産費および所得補償方式が妥当と答申されたにもかかわらずである。さらに11月9日の閣議で、消費者米価引き上げを決定する。翌年1月1日から、平均14.8%の引き上げとなる。8月、森永製菓は、「サンキストレモン」を発売する。清涼飲料水市場を席卷していたコカ・コーラに対抗して、健康イメージを打ち出し、ロングセラー商品となる。9月、大消費地である東京と大阪の、政府の米倉が空っぽになる。1週間分の配給米の在庫もない状態になる。農林省が米の需給予想を誤った結果である。毎年減少し続けている米の消費が予想どおり減らなかったのである。1961(昭和36)年以降、米の消費量は増え続けているが、生産量は予定どおりで、米不足をひきおこしたのである。食糧庁の実務担当者は、米不足の実体をひたかくしに隠し、アメリカから50万tを緊急輸入し、切り抜ける。米の輸入は、翌年105万t、1966(昭和41)年68万t、1967(昭和42)年36万t、1968(昭和43)年27万tと、アメリカ独占資本の食料政策に組み込まれていくことになる。米の裏作である小麦の輸入も増加の一途をたどる。翌年は353万t、1967(昭和42)年は420万tである(農文協文化部、戦後日本農業の変貌、97~99頁)。10月1日、大関酒造は、「ワンカップ大関」(85円)を発売する。列車で売られていたお銚子タイプのお酒は、列車の振動で倒れたりする。その不便さを解消してくれた。レジャー・ブームに乗り、生産が追いつかないほどのヒット商品となる。11月、ペプシコーラは、「ファミリーサイズ」を発売する。12月にはコカ・コーラも「ホームサイズ」を発売する。コーラ大瓶時代に突入した。

三船敏郎の「アリナミン」、長嶋茂雄の「ビオタミン」、ハナ肇の「グロモント」、石原裕次郎の「ユベロン」、王貞治の「リポビタミンD」、弘田三枝子の「アスパラ」など、スター出演のビタミン剤や滋養強壮剤のCMが花盛りであった。高度成長のもと仕事一筋のサラリーマンの間で、栄養剤に頼る人が増加したのである。ビタミンなどを加えた加工乳が人気。バーやクラブに、ミネラルウォーターが登場した。にんべんの「にんべんのつゆの素」(200ml 65円、360ml 110円)発売。1975(昭和50)年頃から、ヒット商品に育ってくる。まだ手作りの家庭の味が健在である。

(4) 住 宅

1月15日、建設基準法改正・施行。ビルの高さ制限が撤廃された。3月1日、住宅公団は、多数回落選者にたいする優遇措置や募集回数の変更などの賃貸住宅募集要領を改定した。4月27日には、郊外団地住宅は地元優先にした。3月、消防庁の調べで、火がでたら逃げ場がない寝室が東京都内に7,000軒あると判明した。4月1日、建設省は、老人世帯向け公営住宅の建設方針を打ち出す。4月、建設省の第5期公営住宅建設3ヵ年計画がスタートした。全国20万戸、東

京都3万1,000戸の予定。6月、ダスキンは、東京で家庭用の化学ぞうきん「ホームダスキン」のレンタルを開始した。2枚セットの2週間レンタルで、料金150円。水を汲んでのぞうきんがけから解放されると、主婦に受け入れられていく。

9月、大建工業は、完全不燃吸音板「ガイロトーン」を発表する。10月、全国浴場組合の浴場1万6,955軒の調査で、濾過装置設備の浴場は3,947軒、殺菌装置設備は1,443軒と判明した。11月12日、東京都は、悪質違反建て売り住宅2棟を強制執行した。11月、東京都は、市街地再開発の一環として、台東区三味線堀に店舗付き都営住宅（地上11階・地下3階建て、170戸）の建設に着手する。12月1日、神奈川県は、部長会で県内の団地建設お断りを申し合わせる。12月12日には、千葉県知事も団地お断りを発表する。

この年、第1次マンション・ブーム。ハイツ、レジデンス、メゾン、シャトーなどいろいろな名が付いた。日本ホームズが、ツー・パイ・フォー工法を導入した。

(5) ファッション

5月頃から、銀座に「みゆき族」が横行する。みゆき通りを中心にして並木通りや銀座通りなどに、ハイティーンを中心とした男女が群れをなし、ショーウインドーやビルの壁にもたれかかり、立ち話をしたり、ダンスを踊った。また何時間も喫茶店でお喋りをしていた。睡眠薬や精神安定剤で、ラリっている者も多かった。ナンパ目的で来る、埼玉、千葉の中流家庭の男女も少なからずいた。ピーク時には1日500人とも1,000人ともいわれている。みゆき族の女性は、頭に三角に折った色物のハンカチをかぶり、ウエストの後ろから大きく結んだ長いリボンをつけたロングスカートをはき、茶色など少し濃いめのストッキングにローヒールの靴か、素足にビーチサンダルというのが基本的スタイルであった。そして手には、フーテンバッグといわれた米の紙袋や、コーヒー豆などを入れる麻袋、もしくは籐や竹で編んだ大きなバスケットを持ち歩くのが特徴であった。高校生が中心だったので、制服を駅や喫茶店のトイレで着替える必要があり、その着替えや外泊用品などを袋に入れていたのである。男性は、少し壊したアイビー派とコンチ派に分かれていた。アイビー派のファッションは次のようであった。頭髪は、レザーカットで七・三にきちんと分けられ、バイタリスやMG5などの整髪料で仕上げられていた。頭にアイビーキャップをかぶる者もいた。シャツは、ボタンダウンが定番である。柄物では、アイビーストライプやマドラスチェック、無地では白か淡いブルーに人気があった。シャツの上にベストとネクタイを着用する者もいた。ズボンは、バミューダーパンツに黒のハイソックス、または、裾がくるぶしから5cm以上も上にきている、つんつるてんのコットンパンツに白いソックス。靴は、スニーカーかスリッポンというスタイルであった。ブランドはVANが基本であった。手には、麻袋か、VANの紙袋である。コンチ派は、ヨーロッパ風のファッションであった。4月に公開された

『007／危機一発』のショーン・コネリーをまねて、ウエストを絞り込んだサイドベンツのジャケットに細身のネクタイを身につけ、アタッシュケースを片手に持つのが、基本スタイルであった。ブランドはJUNであった。全体からすると、アイビー派のほうが多かった(アクロス編集室編著、ストリートファッション1945-1995, 86~89頁)。彼らのお手本となったのが、4月に創刊されたばかりの『平凡パンチ』であった。若者のファッションばかりでなく、ライフスタイル全般まで提案し、大きな影響力を及ぼした。特権的若者でなくても、ファッションにより、注目を集める若者になれることを示したのである。だが9月12日、オリンピックに来る外国人にたいして恥ずかしくないように町をきれいにしようというクリーンアップ作戦の一環として、みゆき族200人が一斉補導され、85人が築地警察署に連行されると、初秋には跡形もなく消えてしまった。若者は、新宿や渋谷・原宿に移り、新しい若者街をつくりだして行く。6月、東洋レーヨン(現在の東レ)は、初のテトロン異型断面糸使用の「シルック」を発売する。6月、ライオン油脂(現在のライオン)は、「液体ハイトップ」を発売した。6月、ポーラ化粧品は、ティーンエイジ向け基礎化粧品「フォンティス」3品を発売した。7月、大丸百貨店は、クリスチャン・ディオールとの契約を解除し、新たにジバンシィとバレンシヤガとの独占契約を結ぶ。百貨店と外国人デザイナーとの提携がさかんになる。夏、トップレスの水着が登場し話題をさらう。ただし、警視庁が発売前「着用した場合、軽犯罪法で逮捕する」と通告したため、東京都内のデパートでは4着しか売れなかった。5月にハリウッドで発表され、ヨーロッパでも真似する女性があらわれた。だが流行に敏感な日本女性でも、この時は隠す美德を選んだ。9月、国際羊毛事務局が、「ウール・マーク」を制定する。11月、クラレは、合成皮革「クラリーノ」を発売した。

この年、ニットウェア、ノースリーブが流行。高度成長で生活に余裕ができ、おしゃれへの関心が高まり、高級服志向が広まった。カネボウはディオールと提携する。レナウン・ルックもアーキン・ニューヨークと提携し、有名デザイナーのパターンによる高級既製服プレタポルテを登場させた。既製服をフランス語のプレタポルテと呼ぼせることで、ハイグレードなイメージを女性たちに抱かせ、飛ぶように売れた。「オートクチュールは売れないが、プレタポルテなら売れる」という成功が、高級既製服時代を開かせた。ワニのマークのラコステ、ペンギンのマークのマンシングウェアが、日本でポロシャツのライセンス生産を開始した。1970年代に市場を席卷することになる。ブランドのイメージが製品に高級感を与え、このマークを付けさえすれば飛ぶように売れた(三田村露子、ブランドビジネス, 88頁)。

(6) 文化・レジャー

4月8日、国立西洋美術館で、フランス以外では初めての「ミロのビーナス」展が始まる。5月21日から6月25日まで、京都市美術館でも開催された。両館合わせて172万人が入場し、こ

れまでの展覧会入場者の最高を記録した。ぎゅうぎゅう詰めの上、ところてん式に押し出され、鑑賞どころではなかったとの、不満も続出した。7月7日、静岡に富士急ハイランドが開園した。8月、千葉に行川アイランドが開園した。10月11日、東京後楽園アイスパレスで、「世界サーフィンパレード」が開かれた。若者の熱気が溢れた。

この年は、4月に東京国立博物館で「ロシア秘宝展」、5月に国立近代美術館で「ピカソ・その芸術の70年展」、10月に東京国立博物館で「日本古美術展」など多くの大がかりな展覧会が開かれた。東京オリンピックを文化的に意義のあるものにしようという、官・民双方の意欲のあらわれである。またこの数年、外来演奏家が多く、日本人の演奏が圧迫される。1月ウィーン八重奏団、4月ランパル、9月ロンドン交響楽団などが来日した。

4月に創刊された『平凡パンチ』は、若者の文化を変えた。昭和20年代の若者は、大人になるための修行期間にある存在であった。『葦』や『青春の手帳』、『人生手帳』という雑誌で、亀井勝一郎や武者小路実篤、堀秀彦などの人生論を愛読し、早く大人に仲間入りできることを夢見ていた。昭和30年代の若者は、石原裕次郎や青春スターのような若者に憧れを抱きながら、歌声喫茶などで、「太陽族」や不良といわれぬように慎ましく暮らしていた。大人になったかれらは今、高度成長の先兵・企業戦士としてがむしゃらに働いている。『平凡パンチ』の創刊が若者のありようを変えたのである。この雑誌の対象は都会の20代のサラリーマンで、コンセプトは「モード、車、女の子」である。「女にもてるヤツが一番偉い」という明確な分かりやすい主張を打ち出したのである。偉さの基準が、今までの分かりづらい「勉強ができること」、「金持ちであること」、「喧嘩に強いこと」でなくなった。女にもてるためには、かっこいい車をもち、好きなファッションを決めることである。今までにない、感覚の解放である。好き嫌いで、ファッションも、恋愛も、政治も決めて良いという主張であった。創刊号は62万部、2年後の1966(昭和41)年には100万部を突破する。若者に受け入れられ、若者のサブカルチャーを変えていったのが、『平凡パンチ』であった(大門正己、安田常雄、天野正子編、戦後経験を生きる、196頁)。

(7) 音楽・テレビ・映画

歌謡曲のベスト・テンは次のとおりである。東京オリンピックの狂騒のなか、青山和子の『愛と死をみつめて』が、レコード大賞を獲得する大ヒットになる。『東京五輪音頭』はレコード会社6社が人気歌手を繰り出し、競作したが、人気は伸びなかった。また、テレビ時代の女性歌手の第一条件としての「整った顔立ち」(美人神話)でなく、あいきょうと勢い、独特のこぶしで演歌の新境地を開いたのが、『アンコ椿は恋の花』を歌った都はるみ(新人賞)と、着流し姿で男歌の『涙を抱いた渡り鳥』を歌った水前寺清子である。新たなスター誕生である。坂本九の『幸せなら手をたたこう』と『明日があるさ』、岸洋子(歌唱賞)の『夜明けのうた』、ザ・ピー

ナッツの『ウナ・セラ・ディ東京』（作詞賞・岩谷時子，作曲賞・宮川泰），越路吹雪の『サン・トワ・マミー』，西郷輝彦（新人賞）の『君だけを』と『十七才のこの胸に』もヒットした。

NHKの「あなたが選ぶ時代の歌」は，次の18曲である。アニマルズの『朝日のあたる家』，カルロ・ルスティケリーの『ブーベの恋人』，『夜明けのうた』，『サン・トワ・マミー』，ザ・ローリング・ストーンズの『テル・ミー』，『君だけを』，『明日があるさ』，ザ・ビートルズの『キャンント・バイ・ミー・ラブ』（1週間で5万枚を売り上げる）と『シー・ラブズ・ユー』と『抱きしめたい』，シルヴィー・バルタンの『アイドルを探せ』，ピーターとゴードンの『愛なき世界』，ビート・シーガー／キングストーン・トリオの『花はどこへ行った』，ベギー・葉山の『ラ・ノビア』，ポビー・ソロの『頬にかかる涙』，松尾和子&和田弘とマヒナスターズの『お座敷小唄』（120万枚を売りあげる），マット・モンローの『ロシアより愛をこめて』，『アンコ椿は恋の花』である。NHKの「あなたが選ぶ時代の歌 ベスト100」では，次の2曲が入っている。美空ひばりの『柔』と北島三郎の『函館の女』である。

前年にヒットした『美しい十代』に続いて，『十七才のこの胸に』がヒットした。『美しい十代』は，現実には存在しない架空の「君」に目覚め，思い詰める十代であり，『十七才のこの胸に』は，思い出をこの胸にじっとしまっておこうとする，「一人ぼっち」の十七才である。後の南沙織『17才』（1971（昭和46）年），桜田淳子『十七才の夏』（1975（昭和50）年）をへて，尾崎豊の『十七歳の地図』（1984（昭和59）年）と『15の夜』（1983（昭和58）年）などにつながっていく（村瀬学，なぜ「丘」をうたう歌謡曲がたくさんつくられてきたのか，117頁）。『平凡パンチ』を読む若者は，感性を解放し，ファッションや車で女をナンパする喜びを学んだ。だが実際の若者は，架空の君を思い詰め，口にも出せずに悩んでいる。あるいは『愛と死をみつめて』で歌われているような，2人だけの濃密な純愛を求める。あるいは『アンコ椿は恋の花』で歌われているような，「波の彼方に行ったきり」の，「惚れちゃならない」恋人に，「よせる思いが灯ともえて」，「すすり泣く」情熱的恋を求める。歌にうたわれる様々な若者も，真実である。

テレビでは，1月5日，NHK大河ドラマ『赤穂浪士』の放映開始。視聴率平均30%，討ち入りの回は53%。大石内蔵助は長谷川一夫，妻りくは山田五十鈴など，空前絶後の配役といわれた。『文藝春秋』1996年2月号で，読者5,500人にアンケートをして選んだ「史上テレビ番組ベスト100」において，143票で第15位。4月1日，NETテレビ（現テレビ朝日）は，「木島則夫モーニングショー」の放送を開始した。わが国初のワイドショー番組。井戸端会議のような話題の身近さで，女性たちの人気を獲得した。4月6日，NHKは，カラー人形劇『ひょっこりひょうたん島』の放送を開始した。1969（昭和44）年4月4日まで。4月12日，東京12チャンネル（現在のテレビ東京）が開局。テレビ局数は48局になる。12月21日，ラジオとテレビ番組のお目付役「放送番組向上委員会」が発足した。メンバーは，洪沢秀雄，茅誠司，松下正寿など。

テレビ番組『忍者部隊月光』、『隠密剣士』などの影響で、小・中学生間に、星形ブリキの手裏剣を投げ合う「忍者遊び」が流行した。失明のおそれがあると、鹿児島県鹿屋市などでは、教育委員会が忍者遊び厳禁の警告をだす。

映画は、キネマ旬報の順位を記しておく（関口祐子編、戦後キネマ旬報 ベスト・テン全史 1946-2002, 120~126頁）。

日本映画の第1位は、日本映画監督賞を受賞した勅使河原宏監督、岡田英次・岸田今日子出演の『砂の女』（勅使河原プロ・東宝）。安部公房の原作を、モノクロの画面で無技巧かつ冷静に映像化した作品である。砂の穴のなかに閉じこめられた主人公が、はじめは抜け出そうとするが、しだいに穴のなかに住む女と欲情で結びつき、穴のなかの生活になじんでいくというストーリーの不気味さは、現代社会に生きるわれわれの状況を、的確に映し出している。このことが圧倒的支持を獲得した理由である。カンヌ国際映画祭審査員特別賞を受賞。第2位は、小林正樹監督、新珠三千代・中村賀津雄出演の『怪談』（文芸プロにんじんくらぶ・東宝）。第3位は、木下恵介監督、乙羽信子・岡田英次出演の『香華』（松竹）。こりに凝った演出、豪華絢爛な画面作りで、内容の面白さを引き立てた。第4位は、今村昌平監督、西村晃・赤木蘭子出演の『紅い殺意』（日活）。居直った女のたくましさやえがいた作品である。第5位は、内田吐夢監督、三国連太郎・伴淳三郎出演の『飢餓海峡』（東映）。第6位は、今井正監督、三国連太郎・小沢昭一出演の『越後つついし親不知』（東映）。第7位は、山本薩夫監督、山村聡・高橋幸治出演の『傷だらけの山河』（大映）。第8位は、豊田四朗監督、京マチ子・桑野みゆき出演の『甘い汗』（東京映画・東宝）。第9位は、今井正監督、中村錦之助・丹波哲郎出演の『仇討』（東映）。第10位は、松山善三監督、小林桂樹・大村崑出演の『われ一粒の麦なれど』（東京映画・東宝）。

外国映画の第1位は、アンリ・コルピ監督、アリダ・ヴァリ／ジョルジュ・ウィルソン出演、『かくも長き不在』。第2位は、フランソワ・トリュフォ監督、ジャンヌ・モロー／オスカー・ウェルナー出演、『突然炎のごとく』。第3位は、アラン・レネ監督、デルフィーヌ・セイリグ／ジョルジュ・アルベルタッツイ出演、『去年マリエンバートで』。第4位は、アンジェイ・ムンク監督、アレクサンドラ・シュロンスカ／アンナ・チェピエレスカ出演、『パサジェルカ』。第5位は、エリア・カザン監督、スタティス・ヒアレリス／リンダ・マーシュ出演、『アメリカ・アメリカ』。第6位は、ヴァレリオ・ズルリーニ監督、マルチェロ・マストロヤニ／ジャック・ペラン出演、『家族日誌』。第7位は、ジャン・リュック・ゴダール監督、ブリジット・バルドー／ミシェル・ピッコリ出演、『軽蔑』。第8位は、トニー・リチャードスン監督、アルバート・フィニー／スザンナ・ヨーク出演、『トム・ジョーンズの華麗な冒険』。第9位は、イングマル・ベルイマン監督、イングリッド・チューリン／ダンネル・リンドブロム出演、『沈黙』。第10位は、グリゴリー・コージンツェフ監督、インノケンティ・スモクトゥノフスキー／アナスタシア・ベルチンスカヤ

出演、『ハムレット』。

興業ベスト・テンの日本映画は次の順位である。1964（昭和39）年4月から1965（昭和40）年3月までである。

第1位が『東京オリンピック』（東宝）・配収12億500万円、第2位が『愛と死をみつめて』（日活）4億7,500万円（スーパー青春スター吉永小百合と浜田光夫の主演でヒット）、第3位が『鮫』（東映）2億8,200万円、第4位が『越後つっし親不知』（東映）2億5,400万円、第5位が『日本侠客伝』（東映）2億5,200万円、第6位が『若草物語』（日活）2億5,000万円、第7位が『香華』（松竹）2億2,748万円、第8位が『怪談』（東宝）2億2,500万円、第9位が『徳川家康』（東映）2億1,500万円、第10位が『黒の海峡』（日活）2億1,300万円。

外国映画は次の順位である。第1位が『クレオパトラ』・配収6億829万円、第2位が『マイ・フェア・レディ』4億7,601万円（アカデミー賞の作品賞など8章を受賞。『踊りあかそう』など数々の名曲が歌われた）、第3位が『007／ゴールドフィンガー』4億6,650万円、第4位が『ローマ帝国の滅亡』2億7,713万円、第5位が『シャレード』2億6,849万円、第6位が『007／危機一発』2億6,038万円、第7位が『シャイアン』2億4,149万円、第8位が『大列車作戦』2億2,605万円、第9位が『勝利者』1億9,262万円、第10位が『サーカスの世界』1億9,104万円。

本年度ピンク映画がさかんにつくられた。300万円の低予算、短期間の撮影期間で、量産されていた。武智鉄二監督『白日夢』と『紅閨夢』、中平康監督『砂上の植物群』が話題を呼ぶ。

10月の調査で、映画館数5,366館。『香華』、『越後つっし親不知』など、1本立て興行が成功した。東宝は、『怪談』などで社外プロとの提携を強化した。三船敏郎と石原裕次郎が共同制作を発表。石原裕次郎は、日活と契約金問題でもめ、出演数が減っている。10月に、旧作映画のテレビ放映が始まる。邦画5社も、テレビ映画の制作を積極的にするようになる。

(8) 本

本のベスト・テンは次のとおりである。軟骨肉腫瘍という難病にとりつかれ、顔の半分を切り取られた女子学生・大島みち子と恋人・河野實の純愛書簡集『愛と死をみつめて』が熱狂的なブームとなり、1年間で130万部という記録的売り上げになった。初版は1万部であった。ブームになるには、マスコミの力も働いた。『産経新聞』の播州版、『毎日新聞』の家庭欄、『女性自身』と『毎日新聞』での特集記事に始まり、ニッポン放送でのラジオ・ドラマ化、TBSの『東芝日曜劇場』でのテレビ・ドラマ化がおこなわれた。またコロムビアからレコード化され、それが日本レコード大賞を受賞する。さらに吉永小百合主演で映画化され、一気に空前のベストセラーとなった。大島みち子の日記『若きいのちの日記』も第4位になる。第2位が、山岡荘八の『徳川家康』（第1巻～第21巻）、第3位が、サトウハチローの『おかあさん』（全3巻）である。第5

位が、大松博文の『おれについてこい!』。第6位が、松下幸之助の『物の見方考え方』、第7位が、大宅壮一の『炎は流れる』(全4巻)、第8位が、A・フランクの『アンネの日記』、第9位が、石原慎太郎の『行為と死』、第10位が黒岩重吾の『廃墟の唇』である。

『山田風太郎忍法全集』(全15巻)は、奇想天外な物語で、読者のストレスを解消する。1年間で約300万部と部数を伸ばし、大人の間で忍者ブームをおこした。

第51回芥川賞は、柴田翔の『されどわれらが日々』、第52回は、該当作なし。第51回直木賞は、該当作なし、第52回は、永井路子の『炎環』と安西篤子の『張少子の話』。

3月、藤子不二雄の「オバケのQ太郎」が『少年サンデー』で連載開始される。1966(昭和41)年12月まで。4月28日、『平凡パンチ』(平凡出版・現在のマガジンハウス)創刊。7月10日、朝日新聞社の1,000万円懸賞小説に、北海道の主婦・三浦綾子の『氷点』が入選した。7月、石森章太郎の「サイボーグ009」が、『少年キング』で連載開始。7月、松谷みよ子の『ちいさいモモちゃん』(講談社)刊行。12月21日、白土三平は、「カムイ伝」を、この年の7月に創刊された『月刊漫画ガロ』(青林堂)の第4号から連載開始。彼の残酷で陰惨な劇画は、高度成長の波に乗れずに、物質的・精神的絶望を増幅させ、アナーキー的直接行動への飢えを深化させていたブルー・カラーの心情に対応するものであるという指摘がある(石子順造、戦後マンガ史ノート、122頁)。東京都が有害図書制度を導入した。『平凡パンチ』、『週刊実話』が第1号である。

漫画の世界で戦記物がブームになり、問題になる。1961(昭和36)年連載開始の、貝塚ひろしの『ゼロ戦レッド』からブームが始まり、本年に連載開始された、吉田竜夫の『ゼロ戦はやと』、ちばてつやの『紫電改のタカ』などでピークを迎える。保護者や識者から、戦争の悲惨さに目をつぶり、それをいたずらに賛美するのは、軍国主義の奨励、偏狭な愛国心にもとづいた偏った正義感の押しつけであると、批判の声があがった。さらに1967(昭和42)年から連載された相良俊輔原作・園田光慶絵の『あかつき戦闘隊』の人気をさらに盛り上げようとして『週刊少年サンデー』が、1968(昭和43)年3月「あかつき戦闘隊大懸賞」として、その漫画に関連した日本海軍兵学校制服・制帽・短剣、軍旗、ヘルメット、アメリカ軍やドイツ軍のコレクションなどを読者への賞金にしたことが、問題を大きくした(竹内オサム、戦後マンガの50年史、90~95頁)。子どもたちは、前年のガン・ブームへの批判、本年の悪書追放運動など関係なく、タダおもしろいから戦記漫画を読み、楽しいからモデル・ガンで遊ぶのである。忍者ブームで、忍者になった者はいない。思想的に影響される者は、ごく少数にすぎない。

この年創刊された雑誌。『マダム』(鎌倉書房)。『オール芸能』(双芸社)。『プレジデント』(プレジデント社)。『現代の理論』(現代の理論社)。『展望』(復刊・筑摩書房)。創復刊誌121誌、休廃刊誌45誌。

(9) まとめ

国際的な大事件が続出した年である。7月、中国で文化大革命の気運が高まり、大混乱に入り込む。この中国が10月に原爆実験に成功する。8月、アメリカ軍が、トンキン湾事件を捏造し、ベトナム戦争の泥沼に入り込む。10月、ソ連でフルシチョフ党第一書記兼首相が突然解任され、ブレジネフ党第一書記とコスイギン首相が政権の座に就く。日本の政治では、池田首相が喉頭がんのために辞意を表明し、佐藤栄作が跡を継ぐ。高度成長のひずみを是正しながらの、高度安定成長を目指す。だが佐藤内閣の最初の中期経済計画のなかに盛り込まれた社会開発が、実現できなかった。住宅などの生活環境施設の充実、社会保障の充実、公害対策などはほとんどおこなわれなかった。公明党が設立された年でもある。原潜入港と暴力行為処罰法改正に反対する激しいデモ運動がおきた年でもある。

経済的には、開放経済への移行が進んだ年である。4月IMF8条国への移行とOECDへの加盟を実現し、経済大国の仲間入りを果たす。社会的にも、東京オリンピックが開かれ、国際社会へのお披露目を果たした年である。国際競争力強化のために、金融界、海運業界、重工業界などで、大規模な合併がおこなわれた。独禁法に触れる可能性を残しながらも三菱重工業が生まれ、戦前の規模を凌駕する規模になった。工業整備特別地域促進法が公布され、臨海工業地帯が各地に作られていく。

この年の前半は、輸出の好調さ、オリンピック関係の建設活動の活発さで好景気を維持した。物価上昇など高度成長のひずみが露呈したこと、オリンピック効果が予想より少なかったことなどを原因として、本年の後半から景気が悪化し、翌年の10月まで景気後退が続く。証券業界も不況である。企業の年間倒産件数4,200件超で、戦後最多。前年の2.4倍以上。成長下の不況といわれた。

自動車産業は確実に成長している。四輪車生産台数は170万台。自動車では世界第4位、トラックでは世界第2位。輸出台数は15万台。トヨタ自動車も日産自動車も、月産1万台体制を確立した。二輪車輸出も好調である。

炉内容積世界一の東海製鉄所第1号高炉が完成する。鉄鋼の生産は、世界最高水準である。トランジスターを用いた電子卓上計算機を、世界で最初に作る。53万円の値段が、技術革新と値引き競争で、急激に安くなっていく。

国際競争力強化のため、金融界でも第一と朝日両銀行が合併し、豊富な資金を企業に貸し付けていく。大合併の結果、合理化が進む。

高速道路建設のために、世界銀行からの5,000万ドル借款契約を結ぶ。ドイツからも2億マルクの資金が入ってくる。郵便貯金高が2兆円を超えた。巨額の資金流入が、経済を成長させる。

実質で12.5%もの経済成長である。

アメリカの反対にもかかわらず、中国とのLT貿易、ソ連との貿易がすすむ。新ココムリストの品目も減少させた。新たなる貿易相手国の開拓が続く。

池田首相は、工業化のために、農業人口を10年後には3分の1にすると発言する。農業の近代化のために、肥料を安定供給する法律を制定する。林業基本法も制定し、林業の近代化を進め、本命である工業の近代化をさらに進めようとする。その結果、兼業農家が増え、農業所得は増大したが、農家の跡を継ぐ者が少なくなる。中学を卒業して、農家を継ぐ者が5.3%しかいない。中学卒業者への求人率は5倍。前年のピークを過ぎたが、地方から就職列車が走り、多くの若者を都会に送り届ける。だが中・高齢者の雇用はむずかしい。政府の農業政策により裏作をできなくされた東北地方の農民を中心とする出稼ぎ者が100万人を越し、家に帰らない・帰れない農民が増大している。その農家では、家庭崩壊をもたらしている。かれらの不満が堆積し、6月にはまた山谷で労務者が騒ぎをおこす。

米価審議会の反対にもかかわらず、生産者米価を今年も引き上げた。全国農協中央会をはじめとする農業団体の政治的圧力により、本年は11.3%の引き上げである。

高度成長のひずみとしての物価上昇は続く。物価は、駆け足の値上がりである。1959(昭和34)年1.4%が、所得倍増計画が始まった1960(昭和35)年3.7%、1961(昭和36)年5.2%、1962(昭和37)年6.7%、1963(昭和38)年7.9%、本年4%の上昇率。政府は、特に値上がり率の高い生鮮食品の価格安定策を発表した。公共料金の値上げには、閣議の了承を必要とした。物価問題懇談会も設置した。しかし物価は上昇し続け、所得の増加に追いつかない。賃金上昇率10%を超えるのは大企業だけで、それ以外のほとんどの国民は、豊かさを味わえない(古川隆久、昭和戦後史、174頁)。

新宿駅の駅ビルが完成する。当時は民衆ビルと呼ばれていた。

ティッシュ・ペーパーやホームダスキンが発売された。高価だが、しだいに便利さゆえに普及していく。

社会的大イベントは、東京オリンピックの開催である。1兆円の巨費を投じて、国際的に恥ずかしくないようにと日本・東京の大改造がおこなわれた。競技場の建設、高速道路など道路網の整備、新幹線の開通、空港の拡充、モノレールの開通、地下鉄の開通、ホテル建設、商店街の整備などが急ピッチでおこなわれた。ゴミ箱もプラスチックに変えられた。みゆき族も銀座から追い出された。飲食店に「オリンピック A マーク」制度を実施した。国際的に恥ずかしくない東京、国際的に誇れる日本を実現しようとして、日本人の豊かさ観も変容した。1956(昭和31)年「もはや戦後でない」として貧困からの解放を宣言し、そこに豊かさを感じた。1959(昭和34)年の御成婚で白黒テレビの売り上げが急増し、三種の神器が急激に普及した。この頃は、小

さな今の豊かさ・幸せを味わったのである。本年、東京オリンピックという国際のお祭りにわき上がった日本人は、ささやかな幸せをかなぐり捨て、がむしゃらに大きな幸せ、遠い豊かさを目指すようになったのである。ここで、日本人は大きな幸せを目指して良いという自信をつけさせ、豊かさ観を変容させた原因を指摘しておこう。①30億ドルのオリンピックと、諸外国を驚愕させたこと。②史上最多の国と選手が参加したこと。オリンピックには、史上最多の94カ国、7,495人が参加した。③予想では13個のメダルを取ればいいはずが、選手強化費用20億円と科学的トレーニングで、金メダル16個を含む29個ものメダルを獲得したこと。金メダル16個は、アメリカとソ連に次いで第3位の数である。女子バレーボールでは、大女ばかりの最強ソ連を、東洋の魔女と呼ばれた、小柄な日本人選手が、「根性とおれについてこい」という大松博文監督によるスパルタ練習の成果で破り、優勝した。マラソン3位の円谷幸吉の力走も自信をつけさせた。④オリンピック開催に合わせて、世界最速の新幹線を開業させたこと。⑤政治的にはまだアメリカの傘のもとにいるが、経済的には、IMF8カ国への移行とOECDへの加盟を実現し、経済大国の仲間入りを果たしたという自信に満ちていたこと。経済援助を受ける側から援助する側へ移ったのである。⑥国際競争に打ち勝つための産業の近代化・高度化が着実に進み、オリンピック景気のもと、経済成長率は実質12.5%という驚異的数値であること。さらに猛烈サラリーマンがビタミン剤を飲みながら、企業戦士として頑張り、物価は上昇しているが、所得も、1959(昭和34)年から急増している。国民所得は前年度で520億ドルと、世界第5位の高さである。これらの要素が、日本人に自信をつけさせ、大きな幸せをがむしゃらに求めさせたのである。総理府がおこなった国民生活調査の『「どのくらいものをもった生活」がしたいか』の数値からも、大きな幸せをがむしゃらに求めていることが分かる。1962(昭和37)年における「ラジオ・ミシン・テレビ・電気洗濯機をもった生活」がしたいが82%、「上記に電気冷蔵庫・電気掃除機を加えた生活」59%、「上記に乗用車・ピアノを加えた生活」15%である。1963(昭和38)年における「ラジオ・ミシン・テレビ・電気洗濯機をもった生活」がしたいが80%、「上記に電気冷蔵庫・電気掃除機を加えた生活」62%、「上記に乗用車・ピアノを加えた生活」20%である。徐々に物の豊かな生活への上昇意識が高まっている。本年における「ラジオ・ミシン・テレビ・電気洗濯機をもった生活」がしたいが93%、「上記に電気冷蔵庫・電気掃除機を加えた生活」80%、「上記に乗用車・ピアノを加えた生活」29%である。本年の普及率をみると、テレビ92.9%、電気洗濯機72.2%、電気冷蔵庫54.1%、電気掃除機40.8%である。この普及率拡大のために、「上記に乗用車・ピアノを加えた生活」が本年に急激に上昇したのである。翌年になると、不景気の影響で、「ラジオ・ミシン・テレビ・電気洗濯機をもった生活」がしたいが91%、「上記に電気冷蔵庫・電気掃除機を加えた生活」82%、「上記に乗用車・ピアノを加えた生活」39%と、全体的に少し減少している。その後の流れを概観しておこう。翌年に三種の神器がほぼ普及し終わる

と、それに代わって3Cへの欲求が高まってくる。だが物をもった生活より、「食べるに困らない生活」,「家族旅行が気軽にできる生活」を希望する者の数も増えてくる。ささやかな、小さな豊かさを希望する者も増えてくるのだ。例えば過去1年間に1泊以上の観光・慰安旅行というささやかな豊かさを実現した世帯は確実に増えている。1960(昭和35)年47.5%の世帯が旅行したが、本年63.3%の世帯が旅行した。平均旅行回数も1.2回から3.1回へと増加した。旅行の平均費用も1万4,400円から3万4,500円に増加した。ただし職場や地域団体の団体旅行が1.1回、家族同伴が1.1回、その他が1.0回だから、家族旅行は気軽にできていない(昭和39年度国民生活白書,26~27頁)。さらに、1976(昭和51)年には「物質的にはある程度豊かになったので、これからは心の豊かさやゆとりのある生活をするに重きをおきたい」という数値が、「まだまだ物質的な面で生活を豊かにすることに重きをおきたい」を抜く。日本人の豊かさ観は、一方で三種の神器や3Cという物の消費欲求を肥大化させながらも、他方では慎ましく、堅実な生活態度のなかで、小さな幸福、ささやかな豊かさに満足してきたのである(NHK放送世論調査所編, 図説 戦後世論史, 55頁)。

豊かさの反面としての公害は拡大している。大気汚染は進む。スモッグが羽田の飛行機を止めた。通産省が、産業公害防止対策を打ち出す。ばい煙や工業排水、地下水くみ上げの規制を強化する。四日市がばい煙規制法の指定地域になる。大都市を中心に、大気汚染の他にも水質汚濁、騒音、地盤沈下等の公害が問題化している。特に騒音の苦情が、苦情件数の半数を占める。下町の町工場が多い。また化学工場での火災が多発する。キノコ雲もあがる火災に、殉職者も多くでる。新潟地震では石油タンク80基以上を焼き尽くした。高度成長に、安全管理が追いつかない。公害に住民が立ちあがる。通産省と静岡県側がだした「石油は公害の怖れなし」という調査が誤りであるという調査結果を沼津市住民が提出し、石油コンビナート進出が阻止された。調査・研究にもとづく住民グループの公害反対運動の初めての成功例である。国や県は、経済との調和を優先し、健康との調和を軽視した。公害関係の法律は、まだ「ざる法」である。国よりも横浜市や東京都など、先進的自治体が、国の基準より厳しい公害防止条例を、先に制定した。「経済の健全な発展との調和を図りつつ」という「調和条項」は、1970(昭和45)年の公害国会で、やっと改正・削除された(河野康子, 戦後と高度成長の終焉, 日本の歴史24, 223頁)。豊かさは、自分たちで守らなければならない。

東京都で8月に、異常渇水が続いた。「東京砂漠」という言葉が流行する。雨量は例年と変わらないのに、1日に15時間も断水するという状態は、高度成長による都市への人口集中とオリンピック工事が原因である。「東京砂漠」という言葉が流行した裏には、都市生活でうるおいが喪失し、人間関係ががさがさに乾いている現実があった。高度成長は各地で水を枯らし、豊かであるうるおいのある人間関係までをも奪ったのである。

母子家庭に豊かさはない。母子福祉法が公布された。資金貸し付けなどによる、母子家庭の福祉向上を目指す。だが母子家庭の生活は厳しい。「おぎゃー献金」運動が全国的規模でおこなわれるようになった。

親は、子どもの豊かさのために立ちあがる。国産の小児マヒ・ワクチンが2月にやっと投与されるようになった。筋ジストロフィー児をもつ親の会が設立された。言語障害をもつ子どもの親も立ちあがる。

特殊児童は、全児童の6%もいるのに、就学率は精神薄弱児で7%にすぎない。文部省は、養護学校の設置を進める。重度精神薄弱児不要手当法が公布された。精神障害者への対策は大きく遅れている。文部省は、要保護・準保護児童を164万人、欠損家庭を126万人と発表した。文部省は、交通事故縮小のために要請された交通教育よりも、算数や国語・外国語の教育の方が大切として、交通教育の義務化に反対した。文部省の腰は重い。やっと小・中・高のプールを、国庫補助70%の割合で建設するようになった。

保育所の数は相変わらず少なすぎる。母親大会で、「ポストの数ほど保育所を」という要望がでた。増え続ける財政負担の引き締め、「女性は家庭に」押し込める家庭保育中心原則の強化に、保育所増設要求が無視されているのである。一方では専業主婦は理想として存在し、他方では働かねば生活できない女性労働者の現実がある。特に農村部での保育所の不足は著しい(朝日ジャーナル編、女の戦後史Ⅱ、158～159頁)。不利な条件で働かねばならない女性に豊かさはない。

卒業をひかえて、教師にたいする暴行事件が頻発する。非行も増大し、少年・少女は危機的な状態にある。そこで文部省は、道徳の指導資料集を配布し、道徳の指導に力を入れる。内容は、愛国心の高揚、天皇の崇拜などであり、道徳とはさほど関係ない。政府に反対・批判する勢力を押しつぶす教育をしようとしているのである。文部省は、軍国主義復活との批判もでた「集団行動指導の手引き」草案を発表した。また文部省は、市町村での家庭学級を開設させる。文部省は、戦前の軍国主義的締め付けで、愛国心を高揚し、批判・反対を押しつぶし、道徳心を養おうという方針のようである。東大の大河内一男学長が、「やせたソクラテスとなれ」と、卒業生に訓示する。式場では読み忘れるが、これこそ真の道徳的内容である。だがその文部省・東京大学と科学技術庁で、大きな夢をはぐくむ宇宙開発・航空にかんして、地上でなわばり争いをしている。

戦没者と生存者の叙勲を発令した。元首相の吉田茂、片山哲、石橋湛山は、最高位の勲章をもらう。国の叙勲に豊かさを感じる人もいる。靖国神社で第2回戦没者追悼式がおこなわれ、天皇・皇后も出席した。

豊かさを学歴で買おうという風潮が強まる。学歴偏重の風潮にともない、有名幼稚園の入学願書受付に、2日間も徹夜する人がでる。自分の子どもが出世競争に勝つために、学歴をつけさせようという親心である。進学率は1960(昭和35)年頃から上昇しだす。男子の高校進学率は、

1960（昭和35）年59.6%，本年70.6%，翌年72%，1975（昭和50）年91%と上昇している。男子の大学進学率は、1955（昭和30）年13%，本年19.9%，1975（昭和50）年40%と急増する。学歴により賃金の差が、かなりでている。全業種平均賃金は、25歳まではさほど差がないが、それ以後確実に差がつき、55歳では、中卒5万5,000円、高卒7万2,000円、大卒8万4,000円である（昭和39年度国民生活白書、284頁）。そのため受験勉強に追われ、社会知識や個性の確立という本来の教育目的からはずれた教育がおこなわれるようになった。浪人生も増える。翌年春、全国で約14万人の浪人がでた。代々木ゼミナールが、1万人の入学式をおこなう。大学生急増対策として、24の私立大学、33の私立短期大学、9学部35学科の新設が認められた。大学入学者21万8,000人、短期大学入学者6万1,000人。だが入学すると、入学金や授業料のどの教育費支出の増大が、家計を圧迫する。新大学生の必需品購入費は、3～5万円もかかる。特に私立大学の学生が、7割以上を占めており、かれらの家計は苦しい。大学の9割近くが、学生が集まりやすい大都市に集中しており、下宿させざるをえない地方の親の負担は、都会の親の2倍である。僻地における教育条件の未整備なども、問題である。来年から団塊世代の波が大学に押し寄せてくる。学歴社会から取り除かれた養護学校が、やっと各県に設置されようとしている。精神衰弱児の就学率は7%にすぎない。子どもの豊かさを実現するため、親はがんばり、耐える。

東海道新幹線が開通したことは、交通関係での豊かさのひとつの実現である。3,800億円の巨費をついやした新幹線は、東京一大阪間を4時間で結んだ。翌年には3時間10分に短縮。最新技術の結晶である新幹線は、利便を生んだが、旅の味を損なった。また騒音問題、在来線の本数削減、採算無視の新幹線建設など、新たな問題をひきおこした。そして数年後に旅客輸送、貨物輸送の分野で、自動車に抜かれていく。国鉄は、電子式座席予約装置の運転を開始した。待たずに予約できるようになる。

交通戦争緩和のため、4兆円を費やす第4次道路整備5ヵ年計画が決定された。だが交通事故の増大が続く。道路交通事故件数55万7,183件、死者1万3,318人、負傷者40万1,117人（昭和39年度国民生活白書、342頁）。車両側に原因がある事故が、97%も占めている。死者数史上最高で、取り締まりを強化しても、焼け石に水。

通勤・通学地獄は続く。都市部への人口集中に輸送力が追いつかないことが原因である。総武線の平井から亀戸の乗車効率315%が、最高のラッシュであった。

紙巻きたばこがん説がアメリカで発表になり、フィルター付きたばこや、パイプたばこに転向する人が増える。男性の喫煙率は約80%。

ライシャワー大使肝炎罹病事件以後、売血による病気が問題となる。輸血の97%が「黄色い血」といわれていた売血であった。厚生省は、献血組織の整備と移動採血車の普及を図る。

一般海外渡航の自由化が始まる。夢のような憧れの海外旅行である。本年だけで12万7,000

人が、「バンザイ」のかけ声とともに渡航した。

消費科学センターが設立され、商品の比較テストなどをおこない、消費者啓蒙運動を始める。まだ不正表示の商品が多い。

全国第2位の広がりをもっていた秋田県八郎潟を埋め立て、大潟村が誕生した。1976（昭和51）年に干拓事業が完了する。オランダや世界銀行からも集めた850億円をついやした。減反政策は1970（昭和45）年から始まる。干拓地に米を作っても過剰米になることが分かっているが、計画とおりの工事遂行の結果である。現在でも、大潟村で問題がおこっている。

王貞治選手が、年間本塁打数の新記録を樹立する。ホームラン王がCMにでる商品も売れている。

切手ブームにわく。発売された「源氏物語絵巻切手」の半数が業者に流れ、10倍以上の高値で取引された。「オリンピック記念切手」も人気であった。

大相撲に、アメリカ人の新弟子（後の高見山）が入門する。もう一つの国際化の実現である。

平均寿命が、男67.2歳、女72.3歳。13歳の男子の身長と体重は、1960（昭和35）年の145cm、37.6kgから、本年150cm、40.4kgと増加している。このような健康や栄養面の改善は、学校給食の普及・改善、医療機関の整備・高度化、公衆衛生の進展、所得水準の向上によってもたらされたものである。しかし多くの問題がある。特に、『国民生活白書』が指摘するように、精神病患者の半数以上が指導も受けずにいるという精神病患者の問題、赤痢やジフテリアなど伝染病対策の遅れ、医療機関の地域格差、医療保障制度の制度格差などが解決していない（昭和39年度国民生活白書、38頁）。

食料に関しては、豊かになっている。エンゲル係数は37.9%と減少しつつづけている。だが食品の質や価格の安定に対する不満が多い。食料にかんして、食糧庁が米の需給予測を誤り、1週間分の在庫もないほどの状態を隠し、アメリカから緊急輸入をするという失態をおかした。子どもの菓子の好みも、チョコレートや飴などの甘いものからスナックなどの軽いものへと変化しだしたことが、本年の出来事として特記できる。「かっぱえびせん」が発売になる。CMのキャッチ・コピーのとおり止まらない超ロング商品となる。ビールや酒類の全面的自由価格制がひかれた。映画俳優や歌手、野球選手などスターが出演するCMにのり、栄養剤や滋養強壮剤の売り上げが、サラリーマンの間で急増した。インスタント食品が増加するなか、「にんべんのつゆの素」が売り出されたが、売り上げが伸びるのは5年後ぐらいから。まだつゆは家庭の味が大切にされていた。ホームサイズも売り出されたコカ・コーラに対抗して、サンキストレモンが売り出され、健康イメージで売り上げを伸ばす。手軽に栄養がとれると「ふりかけ」も人気。栄養と健康を気にしている。

住宅に関して、豊かさはない。世論調査では、住宅や生活環境にかんする不満は、食料や衣料

と比べるとかなり多い。内閣総理大臣官房広報室の「国民生活にかんする世論調査」の「現在の生活で不満に思うこと」の第1位が14%の住生活（東京都区部では不満25%も）、第2位が公共事業施設の9%、第3位が食生活3%と衣生活の3%である（昭和39年国民生活白書、150頁）。比較的住宅条件の良い日本住宅公団の団地は、まだ豊かさと幸せのシンボルであった。1955（昭和30）年年間1万戸から始まり、本年は、年間2万戸の建設。1971（昭和46）年の年間4万5,000戸の建設がピークであった。多数回落選者と地元を優先する措置をとる。しかし千葉県と神奈川県は、団地建設お断りを申し合わせる。そこで建設省の第5期公営住宅建設3ヵ年計画で、全国20万戸、人口集中度の最高である東京都3万1,000戸建設予定がうちだされる。だが大都市で急増している狭小過密住宅（9畳未満2人以上または12畳未満4人以上）の木造アパートの問題は、解決できないでいる。このような狭い民間借家では、台所は92.6%が専用だが、風呂もなく（東京では95.3%がない）、共用便所（東京では79.6%共用）という劣悪な住宅に住んでいる。火事がでたら逃げ場もない。悪質違法建て売り住宅はなくなる。他方、建設基準法改正で、第1次マンションブームがおきている。マンションに、何々ハイツ、レジデンス、メゾン、シャトーなど、高級そうな名前が付いた。高級マンションは家賃5万円から10万円以上で、庶民には高嶺の花。

平均的国民が希望している生活内容を世論調査で調べてみると、①建坪20~30坪程度の和洋折衷の住宅を、50~100坪ぐらいの敷地に建て、②ラジオ、テレビ、ミシン、洗濯機、冷蔵庫、掃除機などの家庭電化製品を整備するなどの生活となっている（昭和39年国民生活白書、74頁）。特に大都市圏での住宅部門の希望は叶えられていない。

ファッション関係では、高級化が進み、豊かである。被服費は、都市世帯では6万8,196円と前年比4.8%増。被服費の物価上昇率3.4%を換算すると、実質1.3%増になる。実質増加率で比較すると、食料費5.3%、光熱費6.7%、住居費1.5%、平均5.7%と最低である（昭和39年度国民生活白書、190頁）。5月から9月にかけて銀座にみゆき族が、出沒した。VANやJUNのファッションをクズした男子、手に大きな袋かバスケットを持ち、ロングスカートをはいた女子が、多いときには1日1,000人以上が銀座にたむろした。男子のファッションのモデルとなったのが、4月創刊の『平凡パンチ』である。女の子にもてる、かっこいいファッションを紹介した。夏には、アメリカで流行のトップレスの水着が発売になったが、警視庁が軽犯罪法で取り締まるとの警告をだすと、4着しか売れなかった。有名デザイナーのパターンによる高級既製服を、プレタポルテと呼ばせることで、高級品イメージを植え付けると、飛ぶように売れた。紳士服は本年6割が既製服だが、種類の多様化、縫製技術の高度化をさらに進め、10年足らずのうちに8割以上になるであろうことを、紳士服製造業界も予想していた。またワニとペンギンのマークのポロシャツが販売になる。このようなライセンス販売により、日本の洋裁技術の高度化、消費者への

高級感付与が可能になり、売れたのである。高度成長で所得も増加し、高級感のあるファッションを着る喜び・豊かさを味わった。

オリンピックに合わせて、大がかりな文化的イベントが多く開かれた。ミロのビーナスに172万人が押し寄せた。ロシア秘宝展、ピカソ展、日本古美術展など、官・民合わせて、オリンピックの意義を高めようと開催された。ここ数年外来演奏家が増え、日本人の演奏が圧迫されることもあった。

4月に刊行された『平凡パンチ』は、若者の文化を根底から変えた。青春が、今までの「大人への修行の時期」から、「自分の感性にまかせて、好きなファッション、車、女の子を選んで良い時期」になった。さらには自分の好みで人生や政治まで決められる時期になった。『平凡パンチ』は、団塊世代のバイブルとなった。

歌謡曲でレコード大賞を獲得し、最も売れたのが『愛と死をみつめて』である。レコード会社の競作で盛り上げた『東京五輪音頭』は、お盆の踊りで使われたりもしたが、さほど伸びなかった。『愛と死をみつめて』という本が、ラジオやテレビでドラマ化され、ベスト・セラーになる。さらに吉永小百合主演で映画化もされ、レコードも本もさらに売れた。純愛を貫く2人の思いを、青山和子が甘えるようにあまったるく歌い、涙を誘った。青春歌謡の『君だけを』、『十七才のこの胸に』も売れる。坂本九は、今でも歌われる『幸せなら手をたたこう』、『明日があるさ』を明るく歌いまくっている。大人の歌としては、『夜明けのうた』、『ウナ・セラ・ディ東京』、『サン・トワ・マミー』などが流行した。独特のうなるようなこぶしで演歌の新境地を開いた都はるみと、男の着流しの姿で男歌を歌った水前寺清子がデビューした。

青春歌謡でデュエットという新しい形態が、この頃流行した。この頃の平均的若者は、恋人として確定した相手はいない。『愛と死をみつめて』で歌われる純愛は、遠い理想である。だからそのレコードや本が売れた。『アンコ椿は恋の花』のように、「好きだ」と唸れない。だが心で空想の「君」を抱き、「二人」となることを願望・意識している。だから『十七才のこの胸に』が歌われた。そしてこの不確かな「二人」を男女で確認しようと、青春歌謡のデュエットが流行したのである。1962（昭和37）年には橋幸夫と吉永小百合の『いつでも夢を』、梓みちよと田辺靖雄の『いつもの小道で』、1963（昭和38）年には橋幸夫と吉永小百合の『若い東京の屋根の下』、島倉千代子と守屋浩の『星空に両手を』、1966（昭和41）年、山内賢と和泉雅子の『二人の銀座』と、二人がデュエットで歌われる。

ビートルズのファースト・アルバムが1週間で5万枚を売り上げ、ビートルズ・ブームを引き起こす。1966（昭和41）年来日し、熱狂を引き起こすことになる。

テレビでは、1月からNHK大河ドラマ第2弾『赤穂浪士』が始まる。豪華キャストで、平均31%、討ち入りの回は53%もの視聴率。4月から、「木島則夫モーニングショー」が始まる。現

在でも主婦に人気のワイドショー番組形式のはじめである。10月のオリンピックは、カラー放送され、欧米21カ国に宇宙中継された。オリンピック開会式61.2%、女子バレー決勝戦85%の記録的視聴率をあげた。放送向上委員会が発足して、ラジオやテレビを管理する。

映画のキネマ旬報の評価では、『砂の女』と『かくも長き不在』がダントツの1位。現代社会に生きるわれわれの状況を的確に映し出している。しかし両作品とも興行ベスト・テンに入っていない。良い映画だが、客が見に来なかったのである。専門家から評価の分かれた『東京オリンピック』（市川崑監督の長編記録映画、次年度のキネマ旬報第2位）が、日本映画の興行成績第1位である。映画評論家の清水昌氏が、「スポーツに対する無知と、それについての無反省な芸術気取りのスノビズム、オリンピックが汚されたような憤りを覚える」とけなしているが、「競技の記録を通じて人間に肉薄する演出」、「スポーツ記録を人間謳歌の詩に高めた」との声もある（植草信和編、キネマ旬報ベスト・テン全集1960-1969、283～285頁）。第2位が、『愛と死をみつめて』である。ベストセラーの映画化であるから、客は来る。映画ならではの優れた技術をふるに発揮し、老若男女を問わず、映画の楽しさを満喫させてくれる映画である『クレオパトラ』や『マイ・フェア・レディ』に客が集まる。ここに映画の与える豊かさがある。映画館数は、5,000館を割ってしまった。年間入場者数431万人、年間1人当たり4.4回見ている。他方でピンク映画やセックス映画が量産されていく。

本のベストセラーは『愛と死をみつめて』である。本が売れ、ドラマ化され、さらに本が売れる。1,000万円の懸賞を、主婦の三浦綾子が受け取る。宣伝も、本の販売に必要。山岡荘八の『徳川家康』はまだ刊行中で、よく売れる。『おれについてこい!』は、スパルタ教育と根性を、ビジネスや教育の世界に持ち込んだ。大人の世界でも忍者ブームをひきおこしたのが、『山田風太郎忍法全集』である。『月刊漫画ガロ』が、白土三平の「カムイ伝」のために創刊され、読者を惹きつける。漫画では、戦記物がブームで、批判をあびる。悪書追放運動がおり、『平凡パンチ』などが、悪書と指定された。だが、おもしろい感動を与える、役に立つ、心を豊かにしてくれる本は、読者を惹きつけ、売れる。

豊かさに関連して国民生活の向上で特記すべきことは、都市勤労者世帯における階層別実収入の格差の縮小、農・非農家間の所得格差の縮小（貯蓄保有額では差がある。本年2月の都市世帯平均74万1,000円、農家世帯平均31万3,000円）という経済の二重構造の緩和による、国民全般の消費生活の平準化が、消費支出の高度化とともに進んだことである。

だが国民生活の向上を阻害する要因として、①住宅、上・下水道、公園などの社会資本の整備の遅れ、②消費者物価の急騰、③大都市への急激な人口集中による交通網や公害などの増大、④地価の高騰による住宅問題の増加、⑤広告や宣伝の激化による浪費的傾向の増大、などの要因が

ある（昭和39年度国民生活白書，2頁）。

豊かさに関連している中階層帰属意識が急増したのが，本年である。「お宅の生活の程度は，世間一般からみて，どの程度と思うか」という質問にたいして，「中の上と思う」，「中の中と思う」，「中の下と思う」を合わせた中階層の割合が，1961（昭和36）年の76%から，本年87%に急増している（90%を超えるのは，1973（昭和48）年からである）。だが「自分の家の暮らしについてどう思うか」という質問に対しては，「十分満足している」4%，「十分とはいえないが一応満足している」57%で合計61%が満足，「まだまだ不備」34%，「きわめて不備」3%で合計37%が不満である。その合計数値は1961（昭和36）年の満足61%，不満34%とさほど変わらない。生活程度は上昇したのに，暮らしの満足度は変わらないのである。その理由の説明を，『昭和39年度国民生活白書』では，次のようにする。実質的な生活程度は確実に増加したが，主観的な満足度は，マスコミや広告の影響で上昇志向型になり，差し引きで数値が変わらなかったのである。国民の実質的階層意識も豊かになり，満足度も豊かになったのであるという（昭和39年度国民生活白書，142～143頁）。筆者は，賛成できない。まず階層意識の世論調査の質問項目が正しくない。「上と思う」，「中の上と思う」，「中の中と思う」，「中の下と思う」，「下と思う」，「不明」の6項目では，ほとんどの人が「中」を選んでしまう。「上の上と思う」，「上の中と思う」，「上の下と思う」，「下の上と思う」，「下の中と思う」，「下の下と思う」という質問項目を入れれば，中階層意識は減少するはずである。1988（昭和63）年から「資産程度」にかんする質問も加わったが，「中」は80%以下である（総理府広報室編，月刊世論調査，平成9年2月号，42～47頁）。実際の生活程度は，高いとはいえない。また生活の主観的満足度が，急増する広告の依存効果で急激に引き上げられ，消費者が常に不満の状態におかれたから，満足度の数値が高まらなかったという説明も，適正でない。そもそも広告とは，消費者の欲しいものを提示し，満足度を高めるものである。反面，広告は，依存効果で満足度を引き上げ，欲求をもっと，もっとと駆り立て，消費者を常に不満な状態にして置くものである。広告費が増大しても，減少しても，広告そのものが存在すれば，消費者は，満足な状態と不満な状態に置かれるのである。広告費が急増したとしても，生活満足度の実質的低下を広告のせいにはできない。

所得は増加し，格差が縮小し，三種の神器をほとんどの人が所有し，中産階層に帰属する意識を9割弱の人がもっても，物価上昇，公害，社会保障の不備，子どもの進学，住宅問題などを考慮に入れると，生活満足度は低下し，豊かさ意識は高まっていない。